

令和5年度

温かい手

●愛の輪ポスター ●障害者週間のポスター ●福祉体験作文 ●心の輪を広げる体験作文



 ふれあいのまち KOBE・愛の輪運動推進委員会

 神戸市

 社会福祉法人 神戸市社会福祉協議会

福祉の心を育む市民運動

ふれあいのまち KOBE・愛の輪運動

愛の輪運動ってなに？

ソーシャル・インクルージョン（社会的包摂：だれもが潜在能力を発揮できる役割を持ってつながり合う地域社会づくり）の理念に基づき、人と人とのふれあいの中で「思いやり」「譲り合い」「助け合い」等の福祉の心を育み、身近なところから福祉の実践につなげ、「ともに生きる」地域社会づくりを目指した神戸の市民運動です。

愛の輪運動の取り組み

●中・高生の福祉体験学習（ワークキャンプ）

市内の中・高生を対象に夏休み中の3日間、自ら進んで福祉施設での体験学習をすることにより、福祉の心を培う取り組みを行っています。



●障がいサポーター養成講座

共に生きる社会を目指して、様々な障がいに関する正しい知識と学び、理解を広げる取り組みを行っています。



●愛の輪ポスターの募集

市内の小・中・高校生を対象に、福祉にまつわる身近な出来事に関心を向けることを目的に「福祉の心」をテーマにした作品を募集しています。



●ボランティア活動の推進

お住まいの区など身近な地域で、幅広いボランティア活動への参加を推進しています。



目次



令和5年度 愛のポスター・障害者週間のポスター	2
令和5年度 福祉体験作文	12
令和5年度 心の輪を広げる体験作文	35



令和5年度 愛の輪ポスター入賞者

応募作品数		
	総数	障害者週間のポスター
小学生	497	(297)
中学・高校	114	(39)
特別支援学校	4	(3)
合計	615	(339)

最優秀賞

【小学生の部】

神戸市立北山小学校 1年 武田 和香那

【中学生の部】

神戸市立筒井台中学校 1年 嶋崎 喜菜

優秀賞

【小学生の部】

神戸市立垂水小学校 3年 真田 志歩

神戸市立高倉台小学校 4年 中村 愛一郎

【中学生の部】

神戸市立西代中学校 1年 山野 右瑠己

神戸市立義務教育学校港島学園 8年 若山 由里香

佳作

【小学生の部】

神戸市立灘の浜小学校 1年 山田 光

神戸市立大池小学校 1年 廣田 咲瑛

神戸市立高倉台小学校 5年 小河 圭右

神戸市立塩屋小学校 5年 石崎 來斗

神戸市立井吹西小学校 5年 渡 結恵

神戸市立塩屋小学校 6年 廣瀬 琴羽

【中学生・高校生の部】

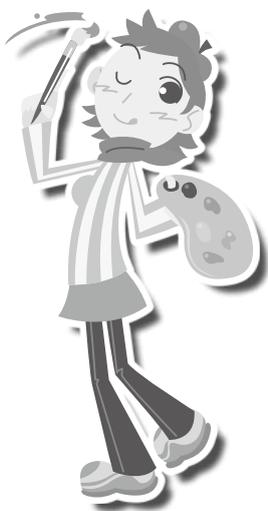
神戸市立広陵中学校 2年 米田 結虹

神戸市立西代中学校 2年 宮地 彩寧

神戸市立横尾中学校 2年 山口 玲奈

兵庫県立神戸聴覚特別支援学校中学部 2年 近藤 理平

神戸野田高等学校 1年 徳永 理子



令和5年度 障害者週間のポスター入賞者

小学生の部

神戸市立南五葉小学校 2年 米澤 佑希

中学生の部

神戸市立太山寺中学校 3年 木原 幹人

令和
5年度

愛の輪ポスター 入賞作品

最優秀賞



神戸市立北山小学校 1年
武田 和香那



神戸市立筒井台中学校 1年
嶋崎 喜菜



優秀賞



神戸市立垂水小学校 3年
真田志歩



神戸市立高倉台小学校 4年
中村愛一郎



神戸市立西代中学校 1年
山野右瑠己



神戸市立義務教育学校港島学園 8年
若山由里香





佳作



神戸市立灘の浜小学校 1年
山田 光



神戸市立高倉台小学校 5年
小河 圭右



神戸市立大池小学校 1年
廣田 咲瑛

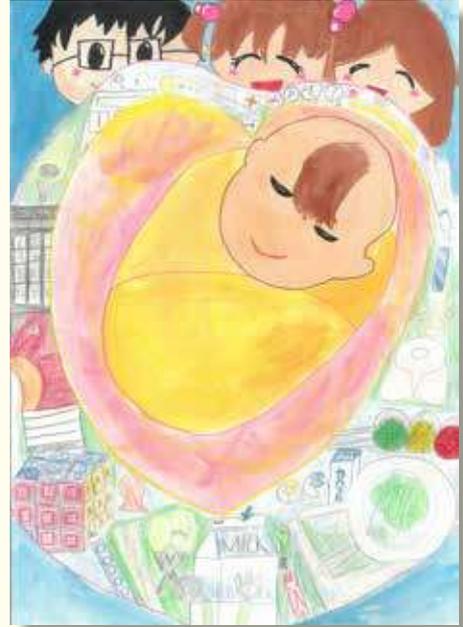




佳作



神戸市立塩屋小学校 5年
石崎 来斗



神戸市立井吹西小学校 5年
渡 結 恵



神戸市立塩屋小学校 6年
廣瀬 琴羽



神戸市立広陵中学校 2年
米田 結虹

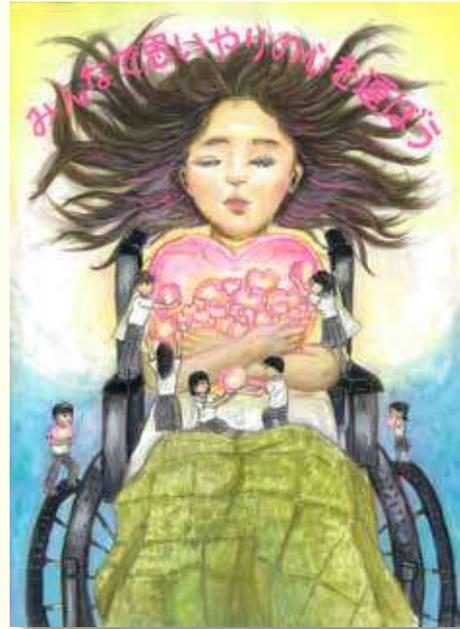




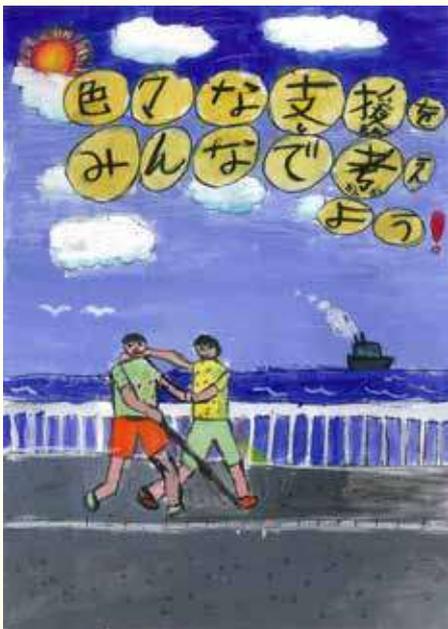
佳作



神戸市立西代中学校 2年
宮地彩寧



神戸市立横尾中学校 2年
山口玲奈



兵庫県立神戸聴覚特別支援学校
中学部 2年
近藤理平



神戸野田高等学校 1年
徳永理子



令和
5年度

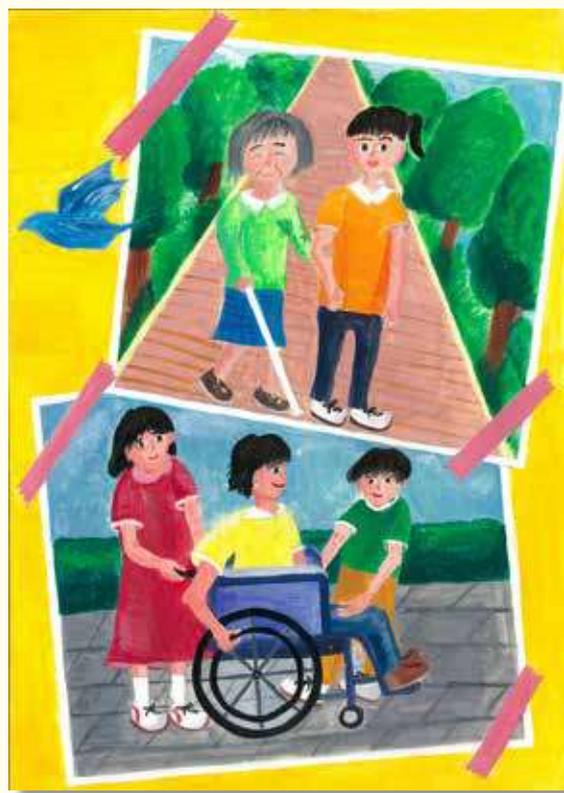
障害者週間のポスター 入賞作品

小学生の部



神戸市立南五葉小学校 2年
米澤佑希

中学生の部



神戸市立太山寺中学校 3年
木原幹人



福祉体験学習(ワークキャンプ)活動の様子

ワークキャンプとは…

市内在学の中・高校生が夏休み中に保育・児童・高齢・障がい者の福祉施設で福祉体験を行い、活動を通して、人とつながりや社会生活の大切さを経験し、「共に生き」「共に学び」「共に育つ」ことへの理解と行動力^{つちか}を培います。

障がい者福祉施設



利用者さんと話をしながら楽しくいろいろな経験ができました。

利用者さんと共に活動をしているところです。無理にせず、優しくするようにしました。



貴重な体験をさせていただきました。



利用者の方々とふれあい、有意義な時間を過ごすことができました。



参加前は不安でしたが、楽しくてあっという間に感じた3日間で、貴重な体験と学びある活動ができてよかったです。

高齢者福祉施設



夏休みの忘れられない思い出になりました！



すごく大変だったけど、その分やりがいを感じとても良い経験ができました。



とても楽しかったです。あたたかい気持ちになりました。とても素晴らしい仕事だと思いました。



利用者様との楽しい会話の時間は素晴らしい思い出です。



初めての経験でしたが、今後の進路などを考えるうえで役立つ大変貴重なものとなりました。



たくさんの利用者さんと関わらせていただき、とても良い学びと経験を得ることができました。



こんな経験ができてよかったです。





保育所（園）・こども園



めったにできない貴重な体験ができました！これからも夢に向かって頑張ります！



初めての経験で慣れないことばかりでしたが、その分たくさん事を学ぶことができました。



みんな小さいのに、絵が上手だな～



子ども達の安全面にも気を付けながら楽しく遊べました。



楽しかったです。



3日間とても楽しい時間をおくれました。



ワークキャンプを終えて保育士になりたいという気持ちがより一層強まりました。



お水遊び楽しいね～!!!

児童館・学童保育



貴重な体験ができてとても楽しかったです!!



貴重な体験ができた、充実した3日間でした。



3日間という短い間でしたが、たくさんの子供たちと関わることができて、いろんな事を学べた充実した期間になりました。



初めてなことが多い3日間でしたが、とても楽しかったです。



子ども達の楽しそうな顔が見られていい経験がすることができました。



楽しかったです。また参加したいです。



なにをして遊ぶ？



児童館で小学生とふれあえて、とても楽しかったです。



令和5年度 福祉体験学習（ワークキャンプ）参加状況

1. 福祉体験学習参加人数(参加 118 校)

	1 年	2 年	3 年	総 計
中学校	212	205	133	550
高等学校	213	282	151	646
				1,196

2. 福祉体験学習参加人数と受け入れ施設数の移り変わり

	中学生	高校生	合 計	受入施設数			中学生	高校生	合 計	受入施設数		
平成元年度	27	10	37	16	ワークキャンプが 始まる1期制	↓	平成 19 年度	532	496	1,028	298	
2 年度	121	62	183	30			1 期制	20 年度	533	445	978	286
3 年度	332	117	449	118			↓	21 年度	490	466	956	312
4 年度	635	275	910	180				2 期制	22 年度	627	582	1,209
5 年度	1,408	442	1,850	275			↓	23 年度	799	526	1,325	319
6 年度	1,326	505	1,831	302				3 期制	24 年度	873	662	1,535
7 年度	1,726	685	2,411	269			↓	25 年度	884	609	1,493	367
8 年度	1,856	715	2,571	314				4 期制	26 年度	973	719	1,692
9 年度	2,302	1,031	3,333	326			↓	27 年度	1,091	879	1,970	360
10 年度	2,298	1,177	3,475	372				2 期制	28 年度	856	697	1,553
11 年度	1,389	1,177	2,566	376			↓	29 年度	824	836	1,660	394
12 年度	1,463	1,118	2,581	397				3 期制	30 年度	812	911	1,723
13 年度	1,305	1,035	2,340	431			↓	令和元年度	724	881	1,605	389
14 年度	1,531	1,309	2,840	402				2 期制	2 年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止		
15 年度	1,054	978	2,032	371			↓	3 年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,429 人)			
16 年度	794	944	1,738	334				3 期制	4 年度	新型コロナウイルス感染拡大の為中止 (応募者数 1,178 人)		
17 年度	688	667	1,355	326			↓	5 年度	551	646	1,196	362
18 年度	611	627	1,238	313								

3. 福祉体験学習の実施日程とお世話になった施設数と参加人数

	日 程	お世話になった施設数	参加人数
1 期	7月25、26、27日	264	485
2 期	7月31日、8月1、2日	254	440
3 期	8月7、8、9日	177	271
合 計 (延べ数)		695	1,196

4. 福祉体験学習施設別の施設数と参加人数

施設種別	参加人数	施設数	施設種別	参加人数	施設数
1. 保育所(園)・認定こども園	720	184	9. 高齢者デイサービスセンター	101	32
2. 児童館	218	80	10. 特別養護老人ホーム	52	20
3. 地域学童保育所・学童保育コーナー	23	10	11. 養護老人ホーム	2	2
4. 児童発達支援センター	1	1	12. 介護老人保健施設	7	5
5. 障がい者入所施設(入所)	1	1	13. 有料老人ホーム	1	1
6. 障がい者多機能型支援事業所	39	13	15. 小規模多機能型居宅介護施設	5	1
7. 障がい者生活介護事業所	17	7			
8. 障がい者就労継続支援B型事業所	9	5	合 計	1,196	362

福祉体験作文

応募作品数

中学生の部	214点
高校生の部	330点
合計	544点

最優秀賞

【中学生の部】

預かるもの 甲南女子中学校 2年 元山 由理…………… 13

【高校生の部】

言葉以外での伝え方 神戸市立六甲アイランド高等学校 2年 大田真菜美…………… 14

優秀賞

【中学生の部】

将来の可能性を広げる 神戸市立本山南中学校 2年 北内 心寧…………… 14

思いやることの大切さ 神戸海星女子学院中学校 3年 宮田 佳歩…………… 16

【高校生の部】

ワークキャンプでの気づき 兵庫県立青雲高等学校 2年 萬代 さら…………… 16

対人援助から学んだこと 神戸常盤女子高等学校 3年 石山沙也加…………… 18

優良賞

【中学生の部】

笑顔で繋がる心 神戸市立高取台中学校 3年 齋藤 雅…………… 19

ワークキャンプでの学び 神戸市立西落合中学校 3年 西 美優…………… 20

思いやりに触れた三日間 神戸市立平野中学校 3年 谷河 優衣…………… 20

【高校生の部】

ワークキャンプで気づいたこと 兵庫県立神戸高等学校 2年 鈴木 香苗…………… 21

言葉にして届ける 兵庫県立神戸商業高等学校 2年 森合伊織理…………… 23

介護の現場に行つて 兵庫県立御影高等学校 3年 熊崎 沙月…………… 24

佳作

【中学生の部】

通じない幸せ 神戸国際中学校 1年 長富 日々…………… 25

私の「住んでいる街」 神戸市立須佐野中学校 2年 岩花 小晴…………… 26

私が分け与えられた温かい気持ち 神戸市立友が丘中学校 2年 内本 栞菜…………… 27

私が学んだ二つのこと 神戸市立本山南中学校 3年 白須 美帆…………… 28

【高校生の部】

「ありのままを受け入れる」ということ 甲南女子高等学校 1年 直江 歌恋…………… 29

ワークキャンプを終えて 啓明学院高等学校 1年 田中 望葉…………… 30

「気持ち」を大切に 兵庫県立神戸高等学校 2年 大谷 彩恵…………… 31

三日間の宝物 滝川第二高等学校 2年 山本のののか…………… 32

最優秀賞作品

中学生の部

預かるもの



甲南女子中学校

2年 元山 由理

「おねえちゃん、おはよう！」

と声をかけてくれたのは、昨日一緒に遊んだ男の子だった。ワークキャンプが始まり二日目の朝、子供たちや先生方に迷惑をかけていないか不安だった私に届くその言葉は、私の不安を一瞬で吹き飛ばしてくれた。きっと私にもできることがあるはずだと思い、元気に園内に入った。

二日目の午前には外で砂遊びをした。外は暑いけれど、大丈夫だろうかと少し心配しながら外に出た。砂場を見ると、砂場の周りに日避けのフェンスが設置されていることに気がついた。すごく配慮されていることを知った。私は安心し、子供たちの遊ぶ様子を眺めていた。そのとき、保育士の方が子供たちを砂場の端に誘導していた。私は不思議に思い、近くに寄ると、フェンスとフェンスの間から日が差していることに気がついた。私の体に対して日が当たっている面積は小さかったし、暑いと感じると無意識に日を避けていたため気づかなかった。だが、私より体が小さい子供たちは少し日が当たただけでもすごく暑いだろうし、子供たちは砂遊びに夢中だったため、危険な状態だったのだ。そのことに保育士の方は逸早く気づき、対応されていた。私は子供のためにできることを考えていたつもりで、自分の感覚でしか物事を捉えられていなかった。子供たちを見るのではなく、子供たちから見て判断することが重要なのだ。少し姿勢を低くすると、分かることがいくつつかある。落ちていた尖った鉛筆、引いたままの椅子、濡れている床、掃除機のコンセントなど、危険なものはすぐ近くにあった。私は細心の注意を払えるよう、気を引き締めた。

午後になって、手が空いた私は保育士の方に仕

事を頂いた。私にもできるような簡単なものだったのだが、量が多く、楽ではなかった。だが、この仕事も保育士の方がされている仕事のほんの一部でしかなかったことを知り、気が遠くなりそうだった。仕事をすることは楽ではないと思ってはいたが、改めて痛感した。少し休憩に保育士の方の作業を見ていた。そして、保育士の方の短い爪に目が留まる。はっとした。即座に自分の爪に目を遣る。やや長かった。私は爪を隠すように拳を握った。子供たちのためにできることをしたいと思っていたのに、ひどく情けない、もっと注意すべきことがあったのだ。命を預かっていたのだ。周りを見て、状況を判断できるようになりたいと思っていたが、その前に、自分の身なりには十分過ぎるほど気をつけて整えようと心に決めた。

このワークキャンプで、私は私の未熟さを知り、それと同時に成長できたと感じている。子供たちの安全を守るために、自分の身なりがとても大切である。そして、子供たちから見た景色に危険なものはないか、それを把握して適格に行動することが必要であることを学んだ。適格に行動できる自信はないが、気づくことから始めたいと思う。保育園は命を預かる場で、命の安全を第一に考えられていた。安全であるという信頼があるのだ。子供を支える方々の些細な気遣いが安全や信頼につながることに、私は感銘を受けた。今回学んだことは、子供たち以外に共通することもあった。きっと難しいことだと思うが、学んだことや知ったことを自分のものにし、今後に生かせるように、そして自分がより成長できるように努力していきたい。

最優秀賞作品

高校生の部

言葉以外での伝え方



神戸市立六甲アイランド高等学校

2年 大田真菜美

一人の女の子が私に向かってわけのわからない動作をしてきた。その時私はその行動が理解できず曖昧な返答をしてしまった。後に女の子がその動作をする訳を知った時、私は自分の行いをとっても後悔した。それと同時に人とコミュニケーションを取れることの大切さに気付かされた。

私はこの夏、3期すべての期で保育園に行っていた。そのためこの出来事が起きた3期目は今までより緊張もほぐれて少し余裕が出ていた。しかし、初日から驚くべきことが沢山あった。私が担当した4歳・5歳の子供たちが自己紹介を指文字と一緒にしていたのであった。それだけではない。保育士さんまでもが、朝の会の日付、天気を手で表現していた。私は不思議に思いながらもいつも通り子どもたちに挨拶をしていた。次の日に例の出来事が起きた。私は女の子にこの行動をされた時、何をしているのだろうと思っていた。しかし、保育士さんのその女の子への接し方を見ると、あることに気がついた。その女の子は耳に障害を持っているのであった。私は今まで耳に障害を持った方に会ったことがなかった。だから、どういう風に話すべきなのか全くわからなかった。そして、あの時は何を伝えようとしてくれたのか後から考えても理解することはできなかった。結局私は、一日中その女の子と話すことができなかった。家に帰ってから自分なりにその子と話せる方法を考え、手話で会話することを目標に練習をした。おはよう、暑いね、手は洗った??などを手話で覚えることはとても難しかった。次の日、その女の子におはようと挨拶をしようと思った。だが、自分の手話が正確に出来ているか不安で、することができなかった。しかし、私は

その女の子がご飯を食べている時に手話である事を聞いた。

「お魚おいしい?」

すると女の子はグッドマークを返してくれた。この言葉は普通に話すことができる私たちにとっては日常の会話に過ぎない。だけど私は、この女の子と会話ができたことがとても嬉しかった。この女の子のクラスの友達も手話で会話をしていた。これは保育士さんが子供たちに教えていたのだった。一人の女の子のためにみんなが練習している姿はすごく素敵だった。手話は聴覚障害を持った方たちと実際に関わらないで習得することは難しい。しかし、手話について少し知ろうとしたり、簡単な挨拶を覚えたりすることはできる。私はこれを機に少しずつ手話を習得していきたい。

また、違う保育園では自閉症を持った男の子がいた。その男の子はお昼寝時間に寝たくないとかんしゃくを起こしていた。しかし、保育士さんたちは、「無理して寝なくていい。眠たくなったら寝たらいいいよ。」

と伝えていた。私はその対応がすごく素敵だと思った。一人一人の個性に合わせて寄り添いゆっくりゆっくり改善していくことができるからだ。

発達障害も聴覚障害も見たい目は私たちと変わらない。だからこそ、その障害に気付いた時どう対応するかよく考え少しずつ寄り添っていくことが大切だと気付いた。

優秀賞作品

中学生の部

将来の可能性を広げる



神戸市立本山南中学校

2年 北内 心寧

「言葉の発達がゆっくりで目もあまり合わない子なの。」

先生はその子を見ながら心配した顔つきでそう

言った。

私は福祉の仕事に興味がある。ついこの間までは障害者と関わる言語聴覚士になりたいと思っていた。しかし母に

「今、将来の夢を一つに決めて可能性を狭めなくてもいいんじゃない。」

と言われたことをきっかけに他の福祉の仕事も考えてみるようになった。初めは「福祉」は障害者や高齢者のことをさしていると思っていたけれど子供も含まれていると分かった。もともと子供と遊ぶことが好きだったからワークキャンプで保育園に行くことを選んだ。

保育園には多くの子供がいた。人見知りの子、甘えん坊の子、活発な子、おとなしい子、様々な子がいた。一人ひとりの性格に合った言葉かけや対応が大切だと学んだ。さらに子供はすぐ笑ったり泣いたり怒ったりと、とても感情が豊かだ。だからその時の状態を瞬時に理解してあげることが必要だと感じた。そのために先生もたくさんいた。何人かで支え合って子供たちを守っているのだと教えてもらった。小さな子供を預かることはそれだけ責任感のある仕事なのだと改めて分かった。

三日間の間に子供たちの前で本を読む機会を二回もらった。どんな本がいいか長い時間をかけて選んだ。しっかり聞いてもらえるか、楽しんでもらえるか不安でいっぱいだった。しかしいざ読んでみると身を乗り出して聞いてくれる子や笑ってくれる子もいた。挑戦してみてもよかったと心から思った。二回目はそれほど緊張しなかった。一回目に子供たちが私の緊張をほぐしてくれたように今度は私が楽しませてあげる番だと感じた。子供たちの顔を見て抑揚をつけてゆっくり読むことを意識した。本当に素晴らしい経験になった。

保育園での仕事はもちろん子供たちと遊ぶだけではなく。食事や布団の準備・片付け、掃除などもあった。初日に方法を教えてもらい、それ以降は

「昨日みたいにお願ひね。」

と先生に言われた。任せてくれている気がして嬉しかったのと同時に強い責任感を覚えた。子供たちや保育園のために、そう思って仕事をした。

保育園で、一人の男の子に出会った。初日、緊張でがちがちだった私のそばに来てくれた子だ。私の膝の上に座りに来てくれたり、抱っこしてというように両手を広げて何度も来てくれたりした。本当に愛おしくてたまらなかった。最終日に先生から

「言葉の発達がゆっくりで目もあまり合わない子なの。」

と教えてもらった。私は驚いた。確かにそれまでその子と言葉での会話はあまりしてこなかった。しかし本当のコミュニケーションとは一体何なのだろうか。

「コミュニケーション」の定義を調べてみると社会生活を営む人間の間に行われる知覚・感情・思考の伝達とあった。私たちはしっかりコミュニケーションが取れていたのだと感じる。心でコミュニケーションを取ることは言葉で会話することよりとても難しい。なぜならお互いの気持ちを考えることが重要だからだ。だからこそ心が通い合った時の嬉しさもあると知った。

それからその子に限らず目を見てたくさん話しかけてあげようと決心した。そうすることで子供たちはそれ以上のものを返してくれた。何よりも嬉しい笑顔という宝物を。

ワークキャンプでの活動はたった三日間で終わった。しかしこの短い期間で保育士としての楽しさや大変さだけでなく子供との接し方も学ぶことができた。さらには本当のコミュニケーションの意味さえも。私にはまだはっきりとした夢がない。しかしいつかこの経験を活かせる日が来てほしい。私の将来の可能性が少しでも広がることを祈って。

優秀賞作品

中学生の部

思いやることの大切さ



神戸海星女子学院中学校

3年 宮田 佳歩

思いやりとは相手に配慮し、相手の気持ちを深く考え接すること、またはその気持ちを指します。私は今回のワークキャンプで思いやりの大切さに強く気づかされました。

今回のワークキャンプで私が担当させて頂いたのは四才児クラスで、ワークキャンプ初日、私がとても緊張しているのを見て、たくさんの子どもたちが「どこから来たの?」「一緒にあそぼうよ!」と声をかけてくれました。みんな初めて会う私に興味津々で盛んにコミュニケーションをとってくれました。その時、一人の男の子が私に向かって突進して抱き着いてきました。自分自身、抱き着かれたことに驚きはしたものの「テンションが上がって勢い余ってしまったのかな?」と思ったので笑っていたのですがその場を見ていた保育士の方が男の子に、「今走ってたの危なかったと思うな、お姉さん先生びっくりしてたよ。」と優しく声をかけていました。そこで私は、もし自分が良かったとしても、その子にとってはこれからお友達と過ごしていく上で、この状況を注意されなかった事は困るのではないか、だから保育士の方は男の子に声をかけたんだと考えました。その後、お昼ごはんの時間になり、私も配膳や食事の補助をさせてもらいました。その中でごはんを中々飲み込めず、お口にずっと溜めてしまう女の子がいました。私も「ごっくんできるかな?」「お茶飲んでみる?」など様々な声掛けをしたのですがやはり難しく、時間が過ぎてしまいました。二日目も同じように声掛けを試みたのですが一日目と変わらずの状態でした。私は家に帰って女の子との会話を振り返ることにしました。そこで何故ごはんをお口に溜めてしまうのか、女の子の気持ち

を全然聞いていなかったことに気づきました。そして私からの声掛けだけでなく、女の子からの話をより多く聞くべきだと考えました。最終日、お昼ごはんの時間に保育士の方にアドバイスを頂き、おかずを小さく切り分けたり、手でごっくんの仕草を試みたりしました。何より女の子に楽しくごはんを食べてもらうべく、好きなおかずや、献立について聞いて会話に花を咲かせていると、自然とごはんを食べ始めてくれて、初めておかずを完食してくれました。このことから、子どもになにかできないことがあった時は自分からお世話するのではなく、まずは同じ目線で相手の気持ちを考えるべきなんだと感じました。

この二つの出来事を通して、物理的にも心理的にも同じ対等な目線にいること、相手のこれらを思って声をかけること、すなわち思いやることこそ、保育という責任ある行為の中で基本となる心構えだと分かりました。

初めての保育体験だったのですが、三日間本当に楽しくて、たくさんの子ども達の笑顔に癒されました。新たな考え方や視点を発見することができてとても実りのある時間でした。このような機会に出会えたことに感謝します。

優秀賞作品

高校生の部

ワークキャンプでの気づき



兵庫県立青雲高等学校

2年 萬代 さら

ワークキャンプに参加した理由の一つに、母の職業が保育士だということが関係している。幼いころから職場での子ども達の様子や、保護者への接し方など、保育にまつわる話を母から聞いていたので、「保育士」という職業が他の人より身近にあり関心があったように思う。その影響で漠然と将来保育に関わる仕事をしたいと思っていたの

だが、現在将来の道を決めなければならない時期に入って、このまま子どもが好きで、上辺だけしか知らない保育士という職業を目指すことに迷いを感じていた。その時、今回のワークキャンプを知って、実際に保育現場に赴き体験することで、将来自分が保育士になれるか、なりたいか、を判断するための参考にしたいと参加した。

日取りが決まり、準備を進めていたときは、楽しみよりも不安が勝っていた。園児たちは自分と仲良くしてくれるか、職員の方々に迷惑をかけないかなど、悩みは尽きず早くも人見知りの自分にこの職業は向いていないのではないかと思った。だが、当日緊張のなか園に向かった私を先生方は温かく迎え入れてくれ、子ども達も積極的に関わりに来てくれた。一日目は幼児クラスでの活動で、自己紹介が終わり、手作りの向日葵の名札を見て「なんて読むの？」と興味津々に聞いてくれた子もいれば、初めて見た知らない人に緊張する子もいた。そんな皆と打ち解けたくて積極的に話しかけ、名前を聞いて、一緒に遊んでいく中で、様々なことに驚かされた。私が活動した園は、子ども達の自主性を大切にしている、歌の時間であっても無理に参加させることはせず、自然と子どもの方から参加してもらうように働きかけていた。皆が歌っているなか自分の好きなことをしている子もいれば、ピアノの音が聞こえ始めると遊んでいたものをすぐさま片付けて歌に参加していく子もいて、それぞれの個性が感じられた。日常の中で、「ピアノが鳴ったら歌の時間だから片付ける」「お茶を飲む前はうがいをする」といった行動を、自分で考えて当たり前に行っていた。正直、私は子ども達はまだ幼く分からないことも多いから、進んで教えなければならないという考えがあったが、この光景を見て良い意味でギャップを感じ、子ども達一人一人がこの保育園のことを教えてくれる先輩のような存在に思えた。

二日目は乳児クラスでの活動だった。初日は子ども達の方から話しかけてくれ、助けられた部分

もあったが、この日は終始自分から積極的に関わっていかないと目も合わせてくれず、接し方に悩んだ。幼児クラスの子達は会話から始まり遊びで仲良くなったが、乳児クラスの子達は遊んでいる所に入れてもらう形で関わることで距離を縮めようとした。そのため新しい遊びを考えるなどの工夫をして子ども達に興味を持ってもらえるよう努めた。反応が薄かったり、無反応だったときもあったけれど、遊びを通じて笑顔を見せてくれたり、「じゃあ、次はこれね。」と新しい遊びを提案してくれたりしたときはとても嬉しかった。幼児クラスと乳児クラスの年齢によって違う関わり方を知ることができた。

最終日はもう一度幼児クラスで活動することになった。初日とは違い、子ども達との距離感もつかめていて緊張せず活動できたのだが、そこで印象に残った場面があった。ラキューというパズルのようにつなぎ合わせ作品を作る玩具で子ども達と遊んでいたときの出来事だった。一人の子どもが自分の作りたい形に出来ずに先生に愚痴をもらっていた。先生は「どうしたら出来るか考えてご覧。」と答えを教えるのではなく、自分で考えるように促していた。その後その子が私の所に来て同じようにぐずっていた。私も先生を見習い、少しのヒントをだし同じように接した。するとその子は少し考え、「この部品を変えればいい！」と閃きおもむろに今まで作った作品を壊し作り替えた。思うようにできた作品を私に見せて「ここを変えたらできた！」と笑顔で楽しそうに言って来る様子を見て、子ども達が自分で考えることの重要さを身に染みて学んだ。自分で考える機会を奪わず、傍観しすぎず、子どもとの丁度いい距離感での接し方を今回のことで少し知れたような気がする。このときの実体験に基づく気づきを私は忘れないだろう。

今回ワークキャンプに参加して、様々な発見と学びがあり、園児たちを通じて自分自身のことも考えることができた。支えてくれた両親やお世話

になった施設の方々、学びをくれた園児達への感謝を忘れず、将来私が歩みたい道の選択の参考にしたい。

優秀賞作品

高校生の部

対人援助から学んだこと



神戸常盤女子高等学校

3年 石山沙也加

私は将来、保育士になることを目指しています。その中で、近年「老幼複合施設」が増えてきていることを知りました。そこで、今回のワークキャンプで高齢者側の福祉を学びたいと思い、介護施設での体験学習に参加しました。

「介護」という言葉はよくニュースなどで目にします。しかし、高齢者のお世話をする事、という大まかなイメージしか持っておらず、具体的にどのようなことを行い、高齢者を支援していくのかを考えたことがありませんでした。そんな私でしたが、ワークキャンプを通して「介護」を様々な視点から学び、感じられたことがありました。

一つ目は、資格の重要性です。介護施設で働く際には、介護士の資格を所持していないとできる仕事が制限されます。その為、資格を所持していない私には入浴や移動介助などができず、利用者様とのコミュニケーションや下膳などの仕事が多くありました。また、配膳もご飯がぎざみ食の方、飲み物にとろみがついている方など、利用者様一人一人を理解していないとできませんでした。このことから介護施設では、介護士の資格を持つこと、利用者様についてしっかりと理解することが必要であると感じました。

二つ目は、毎日の生活支援の大切さです。普段は見過ごされがちな食事やトイレ、入浴、レクリエーションなど、生活の細かな場面での支援の必要性を感じました。同時に、私たちが当たり前

できていることは当たり前ではなく、行動一つ一つ価値のあるものであると感じました。そして、毎日の生活において支援を受けることで、利用者の方々の自信や生きる力が向上し、自立した生活を送ることができるようになるということを知りました。

三つ目は、コミュニケーションの大切さです。利用者の方々が安心して生活し、笑顔で過ごしていただくために、コミュニケーションが欠かせません。朝の挨拶や、食事のときの会話など、些細なコミュニケーションがストレス解消につながるんだなと実感しました。また、利用者の方々には、話を聴くことや、共感することがさらに大切だと感じました。利用者の方々とお話することで、今まで見えていなかった景色に気づくこともできました。そして、生きてきた中で、たくさんのかたちを経験している方々の話は、とても貴重であり、私の視野を広げてくれました。

最後に、介護と保育の共通点についてです。介護と保育の共通点は、どちらも人の生活に密接に関わる社会的なサービスであることです。介護は高齢者や身体障害者、病気などの人々の日常生活の支援をし、健康を保ちながら人生の最後まで暮らせるように支える。一方、保育は乳幼児や児童の保護、教育、発達や心身の健康、社会性の育成などの面で支援することで、子どもたちが健やかに成長することを支える。どちらも、ケアやサポートをする立場にある人（介護士や保育士）が、親身に寄り添って信頼関係を築くことが求められます。コミュニケーション能力や忍耐力、洞察力、適応力、問題解決力、判断力などのスキルを身につけ、利用者の方々や子どもたちとの関係を築きながら丁寧にケアを行うことが必要です。

そして、介護と保育は人間性を大切にすることにおいても共通しています。個人を尊重して、一人一人の背景や性格、価値観を理解し、サポートすることが必要です。また、利用者の方々や子どもたちに対して思いやりや温かい心をもって接す

ることが大切だということも共通していると気がつきました。

このように、今回の経験を通じて、介護の現場で働くことについての理解が深まったとともに、コミュニケーション能力など、人間的な成長にもつながったと感じます。また、保育との共通点である対人援助の楽しさや難しさを見つけたことによって、私の将来に繋がる学びができました。今回の体験を今後の社会生活に活かしていきたいと思います。

優良賞作品

中学生の部

笑顔で繋がる心



神戸市立高取台中学校

3年 齋藤 雅

私は、今回のワークキャンプで障害者施設でお世話になるまで、知的障害を持った方々と関わったことがありませんでした。今までに関わったことのない方々と交流してみたい、自分の将来について真剣に考える機会がほしいと思い、この活動に参加しました。

最初は、利用者の方々と会話ができず、戸惑ってしまい、交流を深めるという目的を果たすことができずにいました。しかし、利用者さんに笑顔で接している職員の方々を見て、笑顔で、目をあわせて接することを心掛けました。すると、少しずつコミュニケーションをとれるようになりました。利用者さんも安心した様子で、心から楽しそうにしてくださいました。この時、コミュニケーションをとるのに会話は必要じゃない、笑顔で、相手とまっすぐに向きあう姿勢が、相手と心を通わせることに繋がるのだと思いました。自分が不安そうにしていたら、当然相手にも不安が伝わってしまうので、相手に安心してもらうために、笑顔は本当に大切なことなんだと知ることができま

した。

障害者施設では、幅広い年齢の利用者さん同士が〇〇さん、〇〇さんとお互いの名前を呼び合い過ぎていました。私は、学校の先生や家族以外で、年齢が大きく異なる人と接することが少なかったため、これにはとても驚きました。葉書作りや体操などを通して、年齢に関係なく、互いに互いを思いやる利用者の方々をすごいと思い、自分も周りこんな関係を築きたいと思いました。そのために大切なのは、笑顔と自分から相手と関わろうとする姿勢なんだとここでも実感しました。これまでの自分は、誰かと関わりたいと思いつつも、自分から心を開けないでいたことを痛感し、これから変えていきたいと強く思いました。

二日目の朝に、利用者の方々とウォーキングをした時、一人の利用者さんがウォーキングの列から抜けて、立ち止まっていたので、笑顔で目線をあわせて、「いっしょに歩きませんか。」と言ったら、利用者さんはうなずいて、手を繋いでいっしょに歩いてくださいました。本当のコミュニケーションをとることができたんだ、とすごく嬉しい気持ちになりました。自分から相手と関わる姿勢を持ち、相手に受け入れてもらえたとき、心が暖くなるのを感じました。

今回のワークキャンプで障害者の方々と関わるまで、自分にとってコミュニケーションをとるには会話が必須で、それが当たり前だと思っていました。しかし、今回の障害者施設での交流を通じて、笑顔は相手に安心を与え、自分から相手と関わろうとする姿勢を持つことが、本当のコミュニケーションをとることに繋がるんだと感ずることができました。この三日間は、自分の成長を感じることができた、とても意味のある三日間でした。福祉という新しい将来の選択肢を見つけることができました。今回学んだことを、これからの将来にも活かして成長していきたいです。

優良賞作品

中学生の部

ワークキャンプでの学び



神戸市立西落合中学校

3年 西 美優

私は今回初めてワークキャンプに参加させていただきました。また、これに参加しようと思ったきっかけはたくさんあるのですが、一番大きな理由は、私の将来の夢が医療従事者になることだということです。この夢も初めはドラマに影響されたからだったため、すぐに変わるのだろうと思っていました。ですが、中学生になってから一度、初対面の高齢の方を助ける機会があり、助けた方が「ありがとうねえ。」と何度も言ってくださり、その時私は当たり前のことなのになぜこんなにもお礼を言うてくださるのか不思議に思っていました。しかし、後日学校の先生から呼び出しがあり、「普通なら、学校も遅れそうな時間だし見て見ぬふりをしてしまいそうなのに、迷わず助けられるのは素晴らしいことだ。」と言われ、それを普通と思えた私は自分が人を助ける仕事に向いているのかなと思い、その時に私は絶対にこの夢を叶えようと思いました。そして、中学2年生のこの時期にワークキャンプのチラシが配られ、体験しようと思いました。ですが去年はコロナウイルスの影響で中止になり、今年、参加させていただくことになりました。その後私は自分が希望していた高齢者施設に行かせてもらえることが決まり、とても嬉しい反面きちんと役に立てるのかという不安もありました。しかし、実際施設に行ってみると、スタッフの方々も利用者の方々もとても優しく、私が抱いていた不安は一瞬で消えていきました。そして、スタッフの方々に仕事を教えていただき実際にさせていただいたりもしました。その中で私は些細なことではありますが、たくさんの方に気づき、学ぶことができました。まず、利用されている方は一人として同じ人がおらず、こ

れまでの長い人生でたくさんを経験しているので中学生の私たちよりも一人一人の特徴がはっきりしていて、このような仕事では、一人一人のことをちゃんと知って、その人にあった話し方をすることや、常に広い視野を持っておかなければならないことなどを学びました。私が行った施設にはいろいろな特徴を持っている方がいらっしや、たくさんのお話を聞かせることができず、ほとんどの方が、自分の家族やこれまでに経験したことを話してくださり、中には戦争を経験した方もいて、当時の話をしてくださる方もいました。その方は教科書に載っていないことが多く、実際にその方自身や身の周りの方々が思っていたこと、外国の地域での暮らしなど、とても貴重な話を聞かせていただき、とても勉強になりました。このワークキャンプでは、普段は体験することのできないことを実際に体験することができたり、たくさんの人と関わりコミュニケーションをとることによって、どんな人とも、気持ちよく会話する力を身につけたりすることができました。どんな方でも笑顔で話しかけると笑顔で返してくれました。だから私は、どんな言葉よりも心のこもった笑顔が大切だと思いました。今回学んだことをこれからの生活で生かしたいと思います。またこのような機会があれば参加したいです。

優良賞作品

中学生の部

想いやりに触れた三日間



神戸市立平野中学校

3年 谷河 優衣

私は中学校最後の夏、ワークキャンプに参加することができて本当に良かったです。今まで二年間中止で残念でしたがそれでも私はこのワークキャンプへの興味が捨てられず、参加を強く希望

しました。

そしてやっとの思いで迎えた一日目、いざ施設の玄関の前に立つと、緊張が襲いかかってきました。そのまま中に入り職員さん達がミーティングをしている様子を聞かせてもらいました。そこでは利用者さん一人一人のことをみんなですっかり考えられていたミーティング内容でした。初めに行った事は利用者さんのシーツ交換でした。ベッドにクッションが置かれているのですが、その数が一人一人違っていたので職員さんに尋ねてみると、それは利用者さんが入所された時に、理学療法士の方がその人の体の状態に合わせて、クッションの位置を考えているということでした。それを知り私はすごく寄りそったケアをされているんだと思いました。その後初めて利用者さんとお話しました。私は緊張もあり、何を話しているのか全く分からなくなって、顔も引きつっていたと思います。でも利用者さんが私に笑顔で優しく接してくださったおかげで少し緊張がほぐれました。その後、利用者さんと一緒に来月の掲示物の準備をしました。職員さんの話によるとこの掲示物というのは、利用者さん達が自分で作ったはり絵やぬり絵を施設内に飾ることで、これは自分が作製したんだという達成感を得るそうです。この施設で最も大切にしていることは「自分でできること」というのを大切にしている、これは健康維持にも繋がるそうです。

二日目には不思議と緊張がなくて、もっと行くのが楽しみでした。「今日は利用者さんと接する時は常に視線の高さを合わせて話をしよう」と決めていました。そうすると、一日目よりも会話が弾んで私も楽しくて嬉しかったです。この日の食事について気づいたことがありました。それは量は同じでも一人一人柔らかさが違ったことです。年齢を重ねると、噛む力や飲み込む力が衰えてくるので、工夫されているそうです。

そして最終日、この日は利用者さんとの交流が多く、過去のお話やここでの生活をたくさん聞か

せていただきました。私も一日目の緊張などはまったく無く、本当に楽しくお話できて嬉しかったです。帰る時間がせまってきた時はもう本当に終わってしまうんだという悲しさがこみ上がってきたと同時に利用者さんが私に「またいつでもおいでね。」と言ってくれました。その時は本当に嬉しかったです。

ワークキャンプを終えてこの三日間を振り返ると、利用者さんとお話している時間一番楽しくて私自身、たくさん笑ってばかりいたことに気づきました。笑顔はコミュニケーションの架け橋だと思います。もちろん施設なのでおしゃべりが好きな人、一人が好きの人など様々な方が生活しています。でも利用者さんがここでの生活を心地良く、快適に過ごせるよう、一人一人との時間を大切にされていました。たった三日間だけでも心温まるやりとりが多く見られて職員さん一人一人の思いやりが感じられました。普段自分が学校に行っているだけでは経験できないことができました。そして私自身、すごくやりがいを感じた三日間でした。簡単ではないと思いますが、より介護士になりたいという思いが大きくなりました。この三日間の経験を忘れずに、今後増えていく高齢者社会に少しでも貢献できたらと思います。

優良賞作品

高校生の部

ワークキャンプで気づいたこと

兵庫県立神戸高等学校

2年 鈴村 香苗

「鈴村さんが今日最終日だから、頑張って来ました。」

一人の利用者さんからかけていただいた言葉だ。無理をしないでほしいと思う気持ちもあったが、それ以上にとっても嬉しく、心がぽかぽかと温かくなった。

私の将来の夢は、特別支援学校の先生になるこ

とだ。母が知的障害などを持つ方の通所施設に勤務していることや小学校の時に支援学級に在籍する生徒と交流したことがきっかけで興味を持ち、教育というアプローチで障がいを持つ子供と関わりたいと思い、この夢を目指している。高校生の間に将来に向けた経験を積みたいと考え、今回のワークキャンプで障がい者施設を希望し、精神障害や知的障害などを抱える方と三日間関わった。

お世話になった施設は、精神障害を抱える方が多く通所し、お弁当作りや歯ブラシのキャップつけなどの軽作業を行う作業所だった。私は、この体験に行くまで、障害についてぼんやりとした知識しかなく、精神障害と聞くとニュースなどから少し怖いイメージもあったため、初日は施設に向かうまで不安と緊張でいっぱいだった。作業開始前に、施設の方から、ほとんどの精神障害は普通に暮らしている中で発症し、ここに来ている方は薬で症状を抑えながら、各自ができる作業を行っていると教えていただいた。緊張が少しほぐれ、ほっとしたと同時に、自分自身が障害という強い枠組みに囚われすぎていたと感じた。

実際に利用者さんと歯ブラシのキャップ付けや検品を行った。利用者さんから作業の手順を一から丁寧に教えていただきながら仕事を行った。どの利用者さんもとても優しく、「何か困ったことがあったらいつでも聞いてくださいね。」「高校生なんですね。将来こういう職業に就きたいんですか。」などと私に声をかけてくださった。そんな優しく、個性溢れる利用者さんはたわいもない会話をしながら互いに協力して作業をしており、作業部屋は「ありがとうございます。」という言葉が飛び交う、あたたかい雰囲気だった。この部屋であった皆さんの出来事から、利用者さんのさらさらとした面をたくさん見ることができ、私の心が何度も和んだ。

主に精神障害を抱える方が歯ブラシの作業を行っていたが、知的障害を抱える方も同じ部屋にいらっしやった。この方のお仕事は作業途中で床

に落ちたキャップを拾うことや外部へのお弁当配達、材料の買い出しで、それ以外の時間はいつも笑顔で同じような言葉を繰り返し話されていた。この方がキャップ拾いの仕事をされた時、どんな時でも他の多くの利用者さんが「ありがとう〇〇さん」と伝えていた。また常に同じことを話されていても誰も否定することはなく、むしろその発する言葉に反応や質問を返していた。人それぞれの個性を認め、尊重すること。当たり前前での行動ではあるが、その大切さを改めて実感した。利用者さんの才能が溢れていた瞬間にも出会った。何人かの方が自作の絵を見せてくださったり、ハーモニカの演奏を披露してくださった。可愛らしい似顔絵やキャラクターの絵、独特な世界観の幾何学模様、素敵な演奏を見たり、聞かせていただいた。障害を持った人の中で絵や音楽に長けている人がいると聞いたことはあったが、実際にその才能を目の当たりにしたのは初めてだった。こんな才能を持った方がたくさんいらっしやることに驚き、もっと世の中にこんな人がいるということを知って欲しいと思った。

できないことがあれば、お互いで助け合い、困っている人がいたら自ら進んで助けに行く。小さなことでも良いことがあった時には、みんなで認め、褒め合う。そんな普通の人でも自然に行うことが難しい行動を、利用者さんが当たり前のように行っていた姿が三日間で最も印象に残った。日常生活を過ごしていると、ついつい自分のことに精一杯になり、周りが見えなくなってしまう。だからこそ、利用者さんが常に周りに気を配り、優しさ溢れる行動をされている姿に感動し、世の中の多くの人に障害を持つ方の様々な面について知って欲しいと思った。また、今回ワークキャンプに参加していなければ、こんな素敵な方がたくさんいらっしやることを知る機会がなかった。普段から色々なことに興味を持ち、機会があればなんでも挑戦する姿勢を忘れないようにし、夢に向かって努力していきたい。

優良賞作品

高校生の部

言葉にして届ける



兵庫県立神戸商業高等学校

2年 森合伊織理

「ありがとう。」

私が今回の活動を通して、今後も大切にしていることと思った言葉です。

私はこの夏、自分の将来について考えるために初めてワークキャンプに参加しました。

ワークキャンプ初日。楽しみだという気持ちと緊張の中、施設に向かいました。施設のインターホンの前で待機していると、園児の保護者さんに「頑張ってるね」と声を掛けられました。すごく嬉しかったし、三日間頑張ろうと改めて思えました。

施設に入ると、優しい先生方や可愛い園児たちが迎え入れてくれました。初めは戸惑いと緊張で表情が強張ってしまったけれど、プール遊びをする頃には笑顔で接することが出来ました。大きくなってからはビニールプールに入って遊ぶことは無かったので、すごく懐かしく感じました。

絵本を読む時間には、園児のみんなに読み聞かせをしたり、一緒に本を読んだりしました。何度も何度も同じ本を「お姉ちゃん、読んで」と持ってくるころから、園児ひとりひとりにお気に入りの絵本があるのだと気付きました。好きなものをずっと好きでいられることは素晴らしいと感じてしまいました。

園児達がお昼寝している時間は先生の仕事の手伝いをしました。色紙を色ごとに仕分けしたり、掃除をしたり、月ごとの展示品を作ったり、おもちゃの消毒をしたり。この他にも沢山の仕事がありました。園児と向き合うだけでなく、園児の保護者さんとも向き合い、その他の業務もこなすのはとても大変だと思いました。

ワークキャンプ二日目には、高等学校の先生が保育園まで会いに来てくれました。「余裕があれ

ば、保育園の先生方がどのような声掛けや行動をしているのか見てみてね」とアドバイスも頂き、残りの一日は先生方の行動にも注目して活動してみました。本を読み聞かせする時は、「これ何ていう動物かな。」とみんなに問いかけていたり、お菓子の時間には昨晚からお腹の調子が悪い子の為に、クラスみんなに「今日牛乳無くなっちゃったからおかわり無いよ。」と嘘をついて、一人だけがおかわりを我慢する状況にならないようにしていました。私だったら「またお腹痛くなっちゃうかもしれないから今日はおかわりダメだよ。」と、その子だけにおかわりを禁止してしまうと思いますが、このような解決策があるのかと驚かされました。他にも、何を言っても泣き止まず、「イヤ。」と返答する園児に対して「泣くのをやめるか、向こうの部屋で泣くか、どっちが良い？」と園児に選択肢を与えたりしていました。選択肢を与えることで自分自身の行動が正しいのか正しくないのかを身を持って学べるのが良い点だと考えました。絶賛イヤイヤ期の園児達にも優しさや厳しさを持って関わっている先生方の姿がとて良かったです。

この三日間という短い時間を通して、私はたくさんのお話を学ぶことが出来ました。その中でも冒頭に述べたように、私は「ありがとう」を大切にしようと思いました。理由は「ありがとう。」と言われるとすごく嬉しいからです。自分が言われて嬉しい言葉は積極的に相手に伝えるということ。例えば本を読んだり、お着替えを手伝うと園児達は必ず笑顔で「ありがとう。」と伝えてくれました。他にも、任された仕事を終わらすと先生方は必ず「ありがとう。」を伝えてくれました。私は先生に、「私も日々の生活の中で相手にありがとうを言葉にして伝えることを心掛けたいです。」と伝えました。すると、「私が意識していることでもあり、大切にしていることなんです。園児達にもそんな風に思ってもらいたくて言葉にして伝えるようにしているんです。気付いてくれて

とても嬉しいです。」と伝えてくれました。これは、高等学校の先生がくださったアドバイスから見つけることが出来た素敵なポイントです。このようにとても広い視野を持っていて、言葉を大切にしている先生方だからこそ園児達は「ありがとう。」と素直に言えるのだと思います。心の中で思った言葉を口にして相手に届けること。それは簡単なようで実はすごく難しいことです。自分を表現するひとつの方法でもある「言葉」。相手とのコミュニケーションツールでもある「言葉」。時には人を傷つけてしまう武器にも変化する「言葉」。「言葉」にはたくさんの意味が込められています。自分が心の中で思ったことはたとえ伝えるのが難しくても伝えること。そして、「ありがとう」を相手に伝えること。これらは私が今回の活動を通して今後も大切にしていこうと思ったことと言葉です。

んが自己紹介をしてくれたり、学生の頃のお話をしてくださって、私の「よろしくお願ひします」の一言に笑顔で返してくれたことがとても嬉しかったです。

午前中はクイズなどのレクリエーションと体操を行いました。日によって利用者の方の調子が違う日があるようでしたが、職員さんは無理に参加させることはなく、一言二言声をかけてからそっとしておいたり、人によっては長めに参加を促してみたりとそれぞれ相手に必要な対応を心掛けていることに驚きました。午後は行事で使う飾りを作りました。一日を通して身体、頭、手とあちこちを動かすことで、朝のお迎えのときには行きたくない様子だった方も午後にはよく話して下さって元気になっているようだったのが印象的です。

私は今までデイサービスでどんなことをしているかというのは、食事と入浴介助くらいしか知らなくて、嬉しそうに帰ってくる親戚の人はどんなことをしているのかと考えていました。でも、今回職員の方がみんな参加できるレクリエーションを考えていることや、デイサービスを利用する前よりも笑顔になる人が多いことを目の当たりにして、やり甲斐のあるとても大切な仕事だと感じました。

その一方で非常に大変な仕事だと感じたのもまた事実です。私が行ったのは利用者が十人程度でとてもアットホームな雰囲気でしたが、五人ほどの職員さんで十分にみるのは難しいと感じました。しかし、それが実現できているからこそ利用者の方は満足して帰っていけるのだと思います。私が何より職員の方の目が行き届いていると感じたのは、夏場ということもあり水分補給が徹底されていたことです。その時の本人の希望や体調によって温かいお茶や冷たいお茶、経口補水液などを使い分けていて、絶えることなく常に利用者の方の手の届くところに用意されていました。そんなふうにみなさんが楽しく、気持ちよく過ごせる

優良賞作品

高校生の部

介護の現場に行って



兵庫県立御影高等学校

3年 熊崎 沙月

私は今回のワークキャンプでデイサービスセンターに行きました。参加したきっかけは、大学で福祉を学び将来福祉施設で働きたいと考えているので、一度は実際の場を経験しておきたかったからです。本当は去年にも申し込んだのですが、コロナウイルスの影響で行けなかったため、今年参加できたことでとても貴重な経験になりました。

デイサービスではまず、利用者の方を迎えに行くところから始まりました。そのときにも日によってどの順番で行くのかを、車椅子を載せる台数や希望の時間、利用者の方同士の相性などで考えていてひとつの気遣いを知りました。三日間とも違う方のお迎えに行きましたが、車の中で皆さ

環境を作っている職員の方々に尊敬の念を抱きました。

私は中学生の時から、漠然と福祉というものに関わっていける仕事につきたいと考えていました。具体的に何がしたいのかということは何も考えておらず、このまま進路を決めてしまってもいいのかという不安もありました。福祉と言っても多岐に渡りますが、障害者福祉が高齢者福祉の施設で働きたいと考えています。今回の体験でよりその思いを深めることができました。職業を実際に見られる機会というのは思いの外なく、介護の現場を体験できたのは私がこの道に決めてから初めてのことです。もちろんたった三日では分かることは少なくてもまだまだ繰り返していく必要があると思いますが、一つの方向性は見えてきました。

私はこれから先大学で福祉を学び、社会福祉士になることをまず目指したいと思います。特に介護の方面を重点的に学び、直接的に利用者の方と関わっていける所で働きたいと思うようになりました。世の中には様々な福祉課題がありますが、それらを正確に把握してその学びを活かせるように精進したいと思っています。そして、利用者の方本人をきちんと見てその人は何を求めているのか、何をすることで笑顔になれるのかということ、判断、実行できるようになることが目標です。この思いを胸に夢を叶えられるよう、頑張りたいと思います。

佳作作品

中学生の部

通じない幸せ



神戸国際中学校

1年 長富 日々

初めて施設に入った時は驚いた。

私は学校で、教室にはっていたワークキャンプのチラシが目に入った。私は夏休みはひまだしと

いう軽い気持ちで参加することにした。たくさんあった施設の中で私は障害者施設を選んだ。理由は、私の母が障害者の方の手伝いをするボランティアをしていたことがありよく話を聞いていたからだ。

私が施設に入ると、部屋の片隅で叫んでいる人、何度も同じ言葉を発している人、何も言わずただ座っている人など、初めて見る光景で言葉が出なかった。私が座っていると、急に手を握られた。すると施設の人が「目が見えないから触って確認するんですよ」と教えてくれた。初めて会った人に手を触られ少し怖かった。でもだんだん手の温かみが伝わってき、なぜか安心する自分がいた。

そして自己紹介の時、一人の障害者の方が「私はハンディキャップを持っているけど、ちゃんと一人の人間だ。」と言っていた。他にも自分と同じようなハンディキャップを持っている人のためにボランティア活動をしているらしい。私はこの人の言葉がすごく心に残った。障害者の人だからすごいと思ったのではなく一人の人間として。

でもまだ一日目は緊張していて、自分から話しかけたりすることはできなかった。でもだんだん施設の方の一人一人の特ちょうや性格が分かってくるような気がした。たとえばその人は、ごはんを食べている時、こまかく切らないと食べることができないのに、おかしを食べる時は、こまかく切らなくても食べることができる。そしてみんな好きなものを食べる時は、笑顔で食べていた。そこで私は初めて、会話は言葉だけではありませんと気づかされた。

二日目からは、少し慣れ、障害者の方とも距離が近くなり、ごはんをこまかく切ったり、一緒にトイレに行き手伝いをしたりすることが多くなった。そして施設に来ている利用者さんはいつも、施設の近くにある小さな食料品店に飲み物などを買いに行く。それについて行ったとき、お店の方は親切に、目の見えない障害者の人のお財布からお金を取り出してあげたりと、とても親切だな、

と思っていた。でもその帰り道、一緒について行っていた施設のスタッフさんが、「あの人も初めてのころは、冷たかったんですよ。」と言われた。私は、時間はかかるかもしれないけれど、誰だって理解することができると思った。そこで私は、「慣れる」ということが、大事な理解への第一歩なのではないかと思う。きっとお店の人も障害者の人に慣れ、親近感がわき、理解しようという気持ちが芽生えたんだと思う。私が外で、大声で叫んでいるひとを見かけても、もう怖いと思わなくなったように。

私は、「障害者」「健常者」なんて分けないで、お互いに慣れ、「私は私、あなたはあなた」というふうに、軽い気持ちで思い合うだけで十分だと思う。

私は、会話は言葉だけじゃない、ワークキャンプに行き、気づかされた。

私が見た障害者の方はみんなキラキラしていた。

佳作作品

中学生の部

私の「住んでいる街」



神戸市立須佐野中学校

2年 岩花 小晴

人生初のワークキャンプは、障害者作業所だった。どんなことをするのか、どんな人がいるのか何も分からない。私の知らない「住んでいる街」。大きな不安と緊張、それと同じくらい大きな期待を持って、私は作業所の扉を開けた。その瞬間、中にいた利用者さんの視線がこちらに集まった。長い時間まじまじと見られていた。後から聞くと、「何にでも興味を示すからね。」

ということだった。

最初はなかなか自分から話すことができず一人でただ作業をしていることも多くありました。でも、「お名前なんていうんですか？」

「どこから来たの？」

など、利用者さんとも徐々に会話も進むようになりました。あとから、

「〇〇さん、喜んでいました。」

と職員さんから聞き、とても嬉しかったときのことは今でも覚えています。

三日間の中で一番難しいと感じたのは、発語のない利用者さんとの関わりです。私がどうすればいいのか分からずあたふたしていると、職員さんが

「雰囲気や空気感が大切なんだよ。」

と言いながら、利用者さんに、にっこりと話しかけていました。すると、その場は和み自然と笑顔が広がっていました。このとき初めて、会話の手段が言葉を声に出すこと以外にもあることを学びました。

この作業所の中で、ある年配の利用者さんに出会いました。その人はいつも率先して職員さんの手伝いをしたり、他の利用者さんに声をかけたり、「〇〇とこれやってくるわ。」

と周りの人も巻き込んで行動されていました。職員さんからも、

「この作業所で一・二番になんでもできる人なんですよ〜。」

と言われており、私もしっかりした人だと思っていました。私に一番に声をかけていただいたのもこの人で、おかげで緊張が少しほぐれ、とてもありがたかったです。色んな人に声をかけ、「みんなと一緒に。」と言って積極的に行動するその利用者さんに何か、勇気を貰えたような気がしました。

緊張していた私に、みなさんから沢山の声をかけていただいた初日、自分から話しかけられるようになり「作業所」のことが少し分かった二日目、声や名前、顔などを覚えて、自分から動けるようになった最終日。この三日間は過ぎるのが早かったです。本当にお世話になりました。三日間ありがとうございました。

私の「住んでいる街」は、まだまだ知らないことだらけです。ここでの経験を生かして沢山のひとと繋がることができれば、よりよい街づくりに貢献できるのではないだろうか。

佳作作品

中学生の部

私が分け与えられた温かい気持ち



神戸市立友が丘中学校

2年 内本 葉菜

私は、小学生のころから介護施設で働く人になりたいと思っていました。実際の仕事の大変さ、難しさなどを母からの話でしか聞いたことがなく、自分自身で体験したいと思い、今年のワークキャンプに参加しました。ワークキャンプの参加は今回が初めてで、ものすごく緊張しました。働く場所が決まり、行きたかった障害者施設だったので、すごくがんばりたいという気持ちが出てきました。

初日は、利用者さんと沢山お話することができました。皆さんとても良い方たちで、すぐに緊張がほぐれていきました。しかし、お昼になると、ある利用者さんがいきなり大きな声を出しました。笑顔が素敵な方だったので、私はとても驚きました。しばらくするとその方も落ち着きを取り戻し、私の帰る時間がきたので、帰ろうとした時に職員の方から

「見守るだけでなく、どうしてそうになってしまうのか、利用者さんの気持ちを考えるのも大切ですよ」

という言葉がかけられました。私は今まで、親切にする、見守ることばかりに目を向けていました。しかし、利用者さんの気持ちを考えて、どうしてそのような行動をするのかを予想するのも大事だと知りました。福祉にとって何を大切にすればいいか沢山学びました。

第2期では、知的障害のある方が沢山いらっしゃいました。あまり出会った事がなかったのでものすごく緊張しましたが、1期のことを生かしてがんばろうと思いました。活動中に職員の方に呼ばれ、行ってみると、ある利用者さんがスプーン的位置を調整していました。私の頭の中は、疑問でいっぱいになりましたが、職員の方が、「知的障害者の人は、このようなこだわりを持っている人もいます。」

と教えてくれました。この言葉を聞いて、どんな行動にも意味はあるんだと気がきました。知的障害者の方は、伝えたくても伝えられず、行動など別の言葉で伝えようとしていると聞き、その通りだと思いました。ご飯を食べるペースがそれぞれだったり、施設に入ったばかりで、構ってほしくて外に出るなど、1人1人行動や言葉が違えど、ちゃんと理由があるのだと知ることができました。

3期では手話を使うことができました。アニメを見たいと手話で表している方がいて、食べ終わってから見ましょうと私も手話で伝えて会話することが出来ました。実際に使う場面がない状態で手話や指文字を覚えてきたので、役に立てる日がきて本当に嬉しかったです。上手に伝えられたのかは分かりませんが、利用者さんは、しっかりご飯を食べていたので、少なくとも「ご飯の後」ということを伝えることが出来たと実感することが出来ました。

普段は緊張して、勇気が出ないことがあるので少し不安はあったけど、利用者さんに話しかけたりすることを通じて勇気への自信がついた気がしてすごく嬉しかったです。

ワークキャンプを通じて福祉にとって大切な沢山のことを学びました。利用者さんの行動をよく見たり、気持ちを考えたりしてこれからのことに生かしていきたいと思いました。そしてワークキャンプで最も嬉しかったことは1期も2期も3期も、最終日に利用者さんや職員の方たちに「あ

りがとう助かりました」「これからもがんばってください」「また遊びに来てください」と言ってもらえてことです。3日間という短い期間だったけど、皆さんの役に立ててとても嬉しかったです。人に感謝してもらえるとすごく温かくて嬉しい気持ちになるということも実感できました。その私の温かい気持ちを、この活動で関わった沢山の人たちに分け与えることができたと思います。

佳作作品

中学生の部

私が学んだ二つのこと

神戸市立本山南中学校

3年 白須 美帆

他者理解。それは、相手のよさを知る、知りたいという姿勢を持つこと。私が中学一年生の時に担任の先生がよく言っていた言葉だ。去年のトライやる・ウィークで私は障がい者施設に行った。そこでは様々な人がいる中でみんなで分かち合い一緒に作業しているところが印象に残っている。そして私は新たな視点で他者理解について学びたいと思いワークキャンプに参加した。また、子どもたちに視点を当て、施設の方がどのように子どもたちに接しているのかなどを学ぶために児童館を希望した。

この三日間、私は様々な体験をさせていただいた。その中で印象に残ったことが二つある。

一つ目は、学習の補助をした時だ。私は主に一年生の補助を担当した。宿題をやっている途中で集中力が切れてしまっていたり、遊んでしまっていたりとなかなか終わらない子がいた。私はその子に、「遊びたいのは分かるけれど、ここまで一緒にやろう。」

と声を掛けた。すると、その子は声を掛けたところまで終わらせてくれた。私はその様子を見て一

度相手のことを認めてあげるとやる気が出てお願いしたことをやってくれるのではないかと考えた。また、「一緒に」と言ったことでひとりですべてをやらないといけないという風に思うてしまうことが少しでも無くなったと考える。これは私自身にも当てはまることだと思う。言ったことをすべて否定されるより一度、「わかるよ。でもね、」という感じに、肯定をして言ってもらう方が受け入れやすく、すべて否定をして嫌な思いをするよりいいと思う。

二つ目は、遊びの補助をした時だ。私は一人の子と一緒に遊んでいた。すると別の子が「一緒にトランプで遊んでほしい。」と声を掛けてきた。その子はいつも一緒に遊んでいる人が帰ってしまい遊ぶ人がいなくなったそう。そこで私は、はじめ一緒に遊んでいた子に、「この子と遊んでくるね。」

と声を掛けた。一緒に遊んでいた子は、なかなか掴んだ腕を放してくれなかった。私はどう言えばよいのだろうと悩んだ。私はふと、言い方に問題があったのではないかと思った。先ほどの言い方だと「さっきまで一緒に遊んでいたのに急に一緒に遊んでくれなくなった。もう遊んでももらえないのかな。」とってしまうのではないかと考えた。そこで私はもう一度、

「一回だけトランプで遊んでくるから、そしたらまた一緒に遊ぼう。」

と声を掛けた。すると腕を放してもらい、

「終わったら戻ってきてね。」

と言ってくれた。最初は急な条件を与えてしまったため相手を不安な気持ちにさせてしまった。しかし、再度声を掛けた時は不安を与えることが少なかったと思う。

この印象に残ったことは、どちらも伝え方に関することである。私は相手に自分の思いを伝えることが苦手だ。それは、相手が自分の思いをしっかり受け取ってくれるかが分からないからだ。そして、その自信の無さからさらに相手に誤解を与

えてしまっていると思う。今回は小学生相手だったので「こういうのはどうかな。」と提案することができたが同級生だったらどうなるのか。きっと、思うようには伝えられないだろう。だからこそ、ここで学んだことを少しでも使えるようにしたいと思う。

このワークキャンプでは伝え方はもちろん参加理由である他者理解についても深く学ぶことができた。これらの経験を基に相手のいいところを見つけ卒業までの学校生活、そしてこれからのステージでも大いに頑張りたい。

佳作作品

高校生の部

「ありのままを受け入れる」ということ

甲南女子高等学校

1年 直江 歌恋

ワークキャンプの三日間では、机に向かう勉強だけでは身につかない貴重な経験をさせていただいた。そして、沢山の方と関わることができ、とても楽しく幸せな時間だった。

私には保育所や高齢者施設で働いている親戚がいることもあり、福祉関係の仕事に興味があったため、昨年ワークキャンプに応募した。ところがコロナウイルスの感染拡大の影響で残念ながら中止になってしまい、実際に足を運ぶことはできなかった。学年が上がり高校一年生になると、本格的に将来のこと、特に文理選択について考える機会が増えた。綺麗事かもしれないが、人の役に立ちたいという気持ちはあるものの、自分のしたいことがはっきりわからず悩んでいた。そんなとき今年のワークキャンプのチラシを見て、進路を考えるという面でも貴重な経験になると考え改めて応募した。障がい者施設にお世話になることが決まり、今年は実際に施設に行くことができる！と思い、楽しみな気持ちが大きくなった。しかし、

自分は小学校の特別支援学級の友達としか関わったことがなかったうえ、このような職業体験は初めてだったこともあり、不安な気持ちもあった。施設のホームページや、気をつけるべきことなどを調べたりして思いつく限りの準備を整えた。

緊張しながらも施設へ行った一日目。最初に施設の方から「障がいは病気ではなく、生まれついでのものであり、個性という捉え方をする。」ということと、この施設では生活介護と就労継続支援B型の二つの事業を展開しているという説明を受けた。その後、就労継続支援B型事業の利用者さんのいらっしゃる部屋へ向かい周りを見渡すと、一人一人の方がそれぞれの仕事を一生懸命こなされているところが目に入った。お菓子の箱作り担当の方は、会話をしながらでも作業のスピードが速く驚いた。自分も利用者さんと同じ仕事をさせていただきながらお話ししていたとき、「お仕事は楽しいですよ。自分の関わったものがお客さんの手に届くと思うと嬉しい。」とおっしゃっていたのがとても印象的だった。お仕事の休憩時間、私の名札を見て名前を呼んでもらったり、挨拶やハイタッチをしにきてくださったお陰で緊張もほぐれた。職員の方ともお話をする中で、利用者さんの特性を活かしたお仕事があることを学んだ。一部の方が壁に向かいカーテンがついている環境で作業をしていらっしゃることを疑問に思い質問してみると、会話や周りの様子などの気が散るものを少なくし、作業に集中してもらうためだ、ということを教えていただいた。環境作りやお仕事の内容など、どのようにサポートすれば働きやすいかを考えることが大切なのだな、と感じた。

二日目は生活介護事業の方々と、施設内の木やお花の水やりからスタートした。それが終わってからは、利用者さんとお話をしていた。そんなとき、私の似顔絵を持ってきてくださった利用者さんがいた。そこには「かレンちゃんだいすき」と平仮名と片仮名の混じったメッセージが書いて

あった。それを見た他の利用者さんが「字が間違ってるよ!」とその方に伝えていたが、私はそのこと以上にメッセージ付きの似顔絵を渡そうと思ってもらえたことが嬉しく、気持ちを届けてもらったことが有り難かった。午後からは、朝のうちに水やりをしたお花を摘んで瓶に飾る活動に参加した。同じ種類のお花や葉っぱを使っているのに、利用者さんによって出来上がる作品が全く異なることを見て、利用者さんそれぞれに個性があり、豊かな感性があるということに気付くことができた。

最終日の朝、利用者さんのところへ行くと「今日で実習終わりなの?」「せっかくお友達になれたのに、明日から寂しくなるなあ」と何人もの方が何回も言ってくださった。三日間自分なりに精一杯頑張ってきたことは価値のあることで、利用者さんに少しでも気持ちを届けることができたのだな、と実感できた。お昼ご飯の後、実習中初めて、利用者さんがタンバリンやカホンでリズムを刻み、施設の方がギターを弾きながら歌を歌っている様子を見た。利用者の皆さんの顔はとても明るく笑顔だった。普段何気なく通り過ぎていたこの場所には、こんなに素敵な空間が広がっていたのだと感動した。終わりの時間が迫り、最後の挨拶をさせていただいたとき、皆さんが静かに私の方を向いて話を聞いてくださった。そしてたくさんの方が挨拶をしにきてくださったことが心に残っている。

活動を終えた今、沢山のことを学べたワークキャンプに参加して本当に良かったと思っている。今回の体験を通じて、人と接するとき、障がいの有無でも偏見や評価の目線でもなく、ありのままの一人の人として受け入れることの大切さを感じた。これから色々な経験を積んでいくにつれ考え方は変わっていくかもしれないが、今感じている気持ちは忘れないでいようと思う。

佳作作品

高校生の部

ワークキャンプを終えて



啓明学院高等学校

1年 田中 望葉

ワークキャンプ初日、私は不安と緊張でいっぱい心を落ち着かせながら施設に向かった。私が今回のワークキャンプでお世話になったのは保育園だ。今まで小さな子供と関わる機会があまり無く、親戚の赤ちゃんや小さい子供達への接し方が全く分らなかったことが、保育園のワークキャンプに参加しようと思ったきっかけだ。

私は0歳から2歳クラスに入らせてもらった。教室に入った時、子供達は先生方と歌を歌っている途中だった。私がドアをガラガラっと開け、顔をのぞかせた瞬間に「この人誰だろう」というような顔で凝視してくる子供達の顔はとても印象深く、今でもはっきりと覚えている。1日目は遊具で遊んだり、きゅうりに水をあげたりした。「自分が水をあげるんだ」と積極的な子がいる中で、なかなか「僕もやりたい」と言い出せない子がいた。私が「〇〇君も水あげたいね」と言っても、コクンと頷くだけの男の子にどのように接すればいいのか分からなかった。その子に対して「きゅうりに元気になってもらおうよ」と声をかけ、一緒に水やりをすることができた。その時の、男の子の満面の笑みは忘れられない。私は色々な性格の子がいて、一人一人が自分の気持ちを持っているから、その子達の思いに寄り添ってあげることが大切なのだと感じた。そうすると、心の距離が近づくきっかけにもなるということに気がついた。そして自分の意見を持ち、主張できるような人になっていくんだなとも思った。

2日目は水遊びをした。たくさん水を浴びて、たくさんはしゃいでいる姿は、「この笑顔を守りたい」と思える程、とても可愛かった。子供との接し方に少し慣れてきて分かった大切なことは、

「お節介になりすぎず適度に手伝う」ということである。最初のうちは、子供達が可愛く、少しでも困っていたらすぐに手を差し伸べてしまっていた。しかし、先生方の対応を見たり、子供達と接しているうちに、それは子供にとっていけないことなのではないだろうかと気が始めた。パズルがはまらず悩んでいる子や、水鉄砲に水を入れないのに、「水が出ない」と言って困っている子を見ていると、とてももどかしくてしょうがなかった。しかし、その気持ちを抑えて、小さな子の成長を見守ること、弱音を吐かずにまずは「やってみる」ということを学ばせてあげることが肝心だなと実感した。「手伝って」と言えない子も多かったため、手伝うか、見守るかの瀬戸際がとても難しく感じた。

小さな子の成長を日々見守ることができる保育士はとてもやりがいを感じられる仕事であると同時に、大切な子供をお預かりしているという責任感が必要な、とても大変な仕事でもある。先生方は可愛いなという気持ちを持ちながらも、いけない事をした子にはしっかり注意をして間違いに気付かせていたため、とてもすごいなと感じた。甘やかすばかりではなく厳しさも忘れてはいけないのだ。子供同士でおもちゃや順番の譲り合いをしている姿、泣いている子の頭をよしよししてあげている姿などを見て、ただ、「危険から守る」「一緒に遊ぶ」だけというような、私が持っていた保育士さんに対してのイメージが、全くの間違いだったことが分かった。手の洗い方や食事の仕方といった基本から、他人に対しての優しさやみんなとのコミュニケーションの取り方なども学習させる、重大な役割を担う仕事であった。決して私が思っていたような簡単な仕事ではなかった。

最初は「あまり意思表示ができない子も楽しませたい、私がそんな子を気にかけてあげられるようになりたい」と考えていた。しかし実際に体験してみると難しく、逆に子供達にたくさん助けもらった。私が担当したのは0歳から2歳のクラ

スであったため、何を言っているのかさえ分からない子もいた。そんな時でも、会話が出来ないからと諦めるのではなく、心を通わせることによってコミュニケーションを取ろうと努力をするべきである。そのためには、恐れずに自分から笑顔で言葉をかけることが大切だと分かった。

着替えの際に、バンザイしている姿やズボンを履こうと足を上げて待っている姿がとても可愛かった。昼食時の前かけを洗っている際に出てくる、無数のご飯粒や野菜の欠片がとても微笑ましかった。3日間でたくさんの「可愛い」を発見した。だからこそ、子供好きが増えて欲しいと強く思う。子供の泣き声が迷惑だと文句を投げる人がいなくなることを願う。

佳作作品

高校生の部

「気持ち」を大切に



兵庫県立神戸高等学校

2年 大谷 彩恵

私は子供の純粋な心が大好きだ。その目にも気持ちにも行動にも嘘はないと自信をもって言える。このワークキャンプでは私自身が子供から学ぶことがたくさんあった。職員として大切にしなければならぬ事に加え、忘れていた事を思い出させてくれた機会となった。

私が児童館に来て部屋に入った途端、子供たちが寄ってきてくれて、早々に折り紙やお手紙や絵をくれた。その後も私と会うたびにプレゼントしてくれて、本当に嬉しかった。子供たちと遊んでいる時に、ある女の子が文字を書いているところを見た。今の私ではあり得ないほど、ゆっくりと一生懸命に文字を書いていた。それを見て、子供たちがくれたプレゼントはただの「お花の形をした折り紙」ではなく、子供の純粋で思いやりのある真っ直ぐな気持ちが詰まった物だと思った。だ

から私は、子供の『気持ち』つまり、「誰かに喜んで欲しい」という意思を大切にしようと思えた。子供に限ったことではなく、誰かの『気持ち』を大切にできる意識を持つことは人と関わっていく上で重要なことだと思う。子供たちは何をすることも本当に一生懸命で、そんな姿が『子供ならではの姿』だと言われぬように、成長してもずっとその姿勢を忘れずにいるべきだと感じた。十七歳の私もきっと健気で素直な時期があったのだろうけれど、今ではもう覚えていない。成長するにつれて幼い頃の健気さを失っていくことは仕方ないと思う。しかし、今の私のように、ワークキャンプのような体験を通して改めて子供の健気さや素直さを大人として見た時に、自分ももっと一生懸命になれるな、とか、もっと素直になってみよう、などと思えたらいいと思う。変わってしまうことは当たり前だから変わった時に改めて気付いて学び直すことができれば、それでいいと思う。

また、職員として子供と接するとき大切なこともわかった。よく家庭科や保健の授業で『個人差』という言葉を目にする。何をすることも必ず『個人差』が生じるということは習ってきたが、児童館に来て子供たちと接することを通して、初めて『個人差』を実感することができた。同じ小学一年生でも私と普通に会話ができる子と、まだ話すことが難しい子がいた。接していくうちに、『個人差』が生まれる原因には、兄弟の有無や育った環境などが大きく影響していることがわかった。職員は、子供の様々な個人差を理解して接する必要がある。小学校の、特に低学年の子供たちはまだ個人差が激しいので、みんなが同じようにできると思い込んだり、他の子供と比べたりすることをしてはいけないと思った。しかし、だからといって、差をつけ過ぎた対応をするのも違うと思う。時と場合によって、うまく個人差を配慮して接しなければならない。

また、職員として、子供同士のコミュニケーションの手助けをすることも大切だと学んだ。一人で

いる子供と自分が遊んであげることももちろん大切で必要だが、そこで他の友達との輪の中に入れてあげることも大切だ。子供たちの仲間づくりの手助けをすることで、子供たちはよりいっそう楽しく豊かに生活することができるはずだ。それもまた子供たちの成長につながる。例えば、二人の子供が喧嘩をしてしまった時の職員の方の対応を気にしてみると、お互いに、公平に、話をさせていた。職員が叱って謝らせるのではなく、子供同士の関係改善のため、お互いが納得いくように手助けをしていた様子が印象的だった。

子供たちはみんな、驚くほどの純粋さを持っている。職員として、その純粋な心や気持ちを大切に扱い、受け止め、寄り添う。それが子供たちが思いやりをもったまま成長してくれるための鍵になると思う。まだ未熟な子供達にとって、自分の作った物や、行動が褒められたり、誰かの役に立っていることを知ることはとても大きいことなのだと思う。色んな事に興味を持ったり、色んな人と関わることで自己を形成していく時期だからこそ職員や友達の存在はすごく大きいと思う。

私は、このワークキャンプを通して、自分が思っていた以上に子供たちから学ぶことが多かった。職員としてどう在るべきか、ということ、職員の方々からはもちろん、子供たちからも学ばせてもらうことができた。そして、子供の素晴らしさに改めて気がつき、忘れていた心を思い出させてくれた。

佳作作品

高校生の部

三日間の宝物

滝川第二高等学校

2年 山本のののか



中学一年の時に一度体験した、ワークキャンプ。コロナが明けて、待ちに待った福祉体験ができる

ようになって、ものすごく嬉しかった。どんな子に出会えるかな、どんな経験ができるかな、ワクワクした気持ちが溢れた。私が担当したクラスは「小鳥ぐるーぶ」。中学一年生の時に担当した一歳児クラスと違って、少し大きくなった幼児クラスだった。

今回、私を受け入れてくださった施設は、幼稚園や保育園ではなく、認定こども園だった。異年齢教育を行っている施設で、普段学ぶことができない沢山のことを学んだ。幼稚園で幼少期を過ごした私にとって、初めて目にすることが多く、興味深い三日間だった。

三から四歳児が一緒のクラスになっている「小鳥ぐるーぶ」は、一日目の私にとって不安でしかなかった。私が伝える言葉が伝わりそうで伝わらない年齢で、自我をしっかり持っている子が多い。どうやって仲良くなろう、と悩んだのが一日目だった。まず、笑顔で目を合わせて話すところから始めようか、と考えた。最初は一、二人、私の顔をちらっと覗き込む子がいる程度。少しずつ少しずつ私に近づいてくる子が増え、私に話しかけてくれる子も多くなった。一日目の帰る直前には、複数の子が私にお別れの挨拶をしてくれる程仲良くなれた。笑顔のパワーというものは凄まじいものだと感じた。目が合ったら、にこっと微笑む。それだけで、多くの子が笑顔で返してくれた。その笑顔が本当にかわいくて、たまらなかった！笑顔は言葉よりも強く心に伝わる道具だと思う。笑顔は一種のコミュニケーションツールだ。忙しい高校生活や勉強の中で忘れていた笑顔は、小さなかわいい笑顔によって、もう一度思い出すことができた。

異年齢教育とは、通常の幼稚園か保育園と大きく違う。三歳、四歳、五歳が一緒に行動し、成長し合う様子を見ることは、非常に新鮮だった。三歳の子にとっては、二歳も上の小学校入学手前のお兄ちゃんお姉ちゃんと共に過ごすのだ。小さい子の二歳差は大きい。私は異年齢教育でどのよう

な違いがあるのかを調べてみようと思い、観察した。一日目はまだ全員の名前も知らない。少し体の大きい子がいて、その子は五歳児だろうか、と考えていた。しかし、話していくうちに、あれ、この子はすごく流暢に話しているな、や、この子はまだはっきりと物事を理解していないな、という風に一人一人の成長の差が見えてきた。二日目、三日目になると、ほぼ全員と友達になれたため、沢山のお話を聞くことができた。まず、三歳の子には、お兄さんお姉さんに対してどう思うのか質問した。驚くことに全員が、お兄さんお姉さんは毎回困っている時に助けてくれる、と答えたのだ。きっと今まで何度も助けられていたのだろう。年齢の違いに大きな信頼関係があったのだ。そしてよく全員の様子を見てみると、一人一人が尊敬し合い、支え合っていたのだ。三歳の子にはできないことが沢山ある。例えば、昼寝をするための布団は自分で持って行けない。そんな時、必ず助けに入るのが、四歳、五歳の子である。先生にも、私にも助けは求めない。自分達で解決しようと行動する。その姿を見て、私は感動した。これが異年齢教育の良さだと思った。教え合い、助け合い、支え合うことは子ども達にとって大きな成長に繋がっている。私はこの異年齢教育がさらに世間で広がって欲しいと感じた。

この三日間で、気づいたこと、知ったこと、発見したこと、数えきれない程に経験した。もっともっと未来の社会を担う小さな命から、私は知らないことを学んだ。例えば、幼児の接し方や幼児の行動の仕方。見ていて飽きることがなかった。幼児の成長に気づくだけでなく、自分までもが成長できた三日間だった。私はこんな貴重な体験をさせてくれた子ども達に心から感謝している。私と沢山遊んでくれた子。私が朗読するお話を最初から最後までずっと聞いてくれた子。私の隣で話をしてくれた子。クイズを出して、私にお話をしてくれた子。私の名前を一番に覚えてくれた子。どの子も私にとって大好きな「ともだち」でこれ

からも一生忘れることはない。そんな「ともだち」にはこれからの未来、辛い思いをして欲しくない。私はこの三日間の最終日には、私の大きな夢は決まっていた。

それは「ともだちが辛い思いをしない未来を創る仕事がしたい。」だ。

簡単なことではないし、絶大な夢だ。それでも、この夢を叶えたいのは、子ども達、「ともだち」の笑顔が私の支えになっているからだ。

令和5年度 心の輪を広げる体験作文 入賞作品

応募作品数	
小学生の部	9点
中学生の部	9点
高校生・一般の部	41点
合計	59点

最優秀賞

【小学生の部】

あなたのまわりで 神戸市立井吹の丘小学校 5年 山下 京…………… 36

【中学生の部】

心を見よう 神戸市立小部中学校 3年 山口 梨紗…………… 36

【高校生・一般の部】

音楽なんて嫌いや！ 仁瓶 光夫…………… 38

優秀賞

【小学生の部】

みんなとなかよくなりたい 神戸市立雲中小学校 1年 島名 宇美…………… 39

【中学生の部】

障害を持っている方達との出会い 神戸市立飛松中学校 3年 四元 日弦…………… 39

【高校生・一般の部】

物は試し 神戸市立神港橘高等学校 2年 五島 結愛…………… 40

佳作

【小学生の部】

ありがとうとごめんね 神戸市立雲中小学校 6年 前川 鈴…………… 42
 すべての人に優しい物 神戸市立鈴蘭台小学校 6年 山川 七菜…………… 42

【中学生の部】

最も良い接し方とは 神戸市立小部中学校 3年 山本 匠真…………… 43
 年寄り笑うな行く道だもの 神戸市立丸山中学校 3年 山田凜乃花…………… 44

【高校生・一般の部】

私のきらいだった友達 神戸市立神港橘高等学校 2年 新田 凜…………… 45
 知識をつけ、助けよう 神戸市立神港橘高等学校 2年 長谷 美憂…………… 46

最優秀賞作品

小学生の部

あなたのまわりで



神戸市立井吹の丘小学校

5年 山下 京

習い事のサッカー教室の帰り、電車に乗り座席に座りました。少しするとおじいさんが電車に乗ってきました。すでに席はうまっています座れる所がなく、少しの間、おじいさんは立っている状態でした。私は、つかれてねむってしまいそうになりながら座っていました。すると、若いお兄さんが、

「この席どうぞ。」

と、自分が座っていた席を指さし、ゆずっていました。おじいさんは、

「いいのかい、では、お言葉に甘えて。」

と言ってホッとしたように席に座ってゆっくり休んでいました。

わたしは、「この席どうぞ。」という言葉が耳に残っていました。席をゆずれる人は、心や体力にゆとりがある人なのだろうか。そんな事を考えていると、また次の駅でおばあさんが乗ってきました。私は、あの若いお兄さんの言葉「この席どうぞ。」を思い返しました。私も、お兄さんのように席をゆずってみようと思いました。

いざ、ゆずろうとすると心ぞうがバクバクとしてとてもきんちょうしました。勇気をふりしぼって、おばあさんに声をかけてみました。お兄さんと同じ言葉、

「この席どうぞ。」

私は、きんちょうして声が小さかったけれど、しっかり伝わったようで、「いいの。ありがとう。」とニコッと笑ってゆっくり座っていました。

私はきんちょうしていたけれど、「ありがとう。」の一声できんちょうがほぐれたのが分かりました。人を助けることができたのが何だかうれしかったです。

私は他にも席を必要としている人がいるのではないかと思い、家に帰って調べてみました。すると、年をとった人以外にも妊婦の方や足などが不自由な方、ヘルプマークを付けている方などと書いていました。

私は、ヘルプマークを付けている方というのが気になりました。これを付けている方は見た目は若く、元気そうでも、体や心の中はあまり良い状態ではない人が付けるマークだそうです。外見だけでは分かりにくいので、ヘルプマークは便利だなど思いました。しかし、身に付けていても、周囲の理解不足により苦しんでいる人もいます。そのようなことにならないためには、どのような人にも席をゆずれるようになれば問題ないと思います。ヘルプマークを付けていなくても、体調が悪い人もいると思うので、様々な人の異変に気付くようになりたいです。

調べていく中で、電車やバスなどで座席を必要としている人が思っている以上多いことに気付きました。

「この席どうぞ。」

というこの一声でたくさんの方が救われると思います。私はまだ小学生なので、「社会を変える」ことは難しいですが、個人的にできることは、いくつもあることに気付くことができました。できることは精一杯、これから見つけて行動しようと思いました。

最優秀賞作品

中学生の部

心を見よう



神戸市立小部中学校

3年 山口 梨紗

私は2年生の時、トライやる・ウィークで障害者支援施設に行きました。私はそこで人の心の温かさを感じ、心を見る大切さを改めて知ることが

できました。

トライやる・ウィーク1日目、初めて施設に入ったとき、私はいろいろな方がいるのだと気付きました。頭部ヘッドカバーを使っている方などがいらっやいました。私は最初この方たちと仲良くなれるのか不安でした。はじめは施設の方たちと一緒に体育館で散歩を楽しみました。マットを敷いたりラジオを準備したりもしました。

準備をしているとき、利用者の一人が私も手伝うよと言って助けてくださりました。私はそのときとても嬉しかったです。その方は私たちを温かく迎えてくださり、散歩のときも色々なお話を聞かせていただきました。猫が好きで猫の服を着ているのだと教えてくれたり私の名前と呼んで笑顔でお話してくれたり、おかげで緊張はすぐに解きました。そのおかげもあり、他の利用者の方々ともお話しできるようになりました。どう接したらいいのだろうという不安な気持ちが嘘みたいに消えたことがわかりました。日を重ねるごとに施設の方たちと和気あいあいとした時間を過ごせました。

そんな活動の中で、特に印象に残っている方がいます。その方は無口な方で、頭部ヘッドカバーを被っていました。その方はいつも一人で部屋の隅にいて、折り鶴を折っていました。私が初めてその方に話しかけたとき、何も答えてもらえませんでした。何度か話しかけても、反応は同じでした。でも、4日目の自由時間、その方との交流に変化が生まれました。その日もその方は一人で鶴を折っていました。私は、

「一緒に折りませんか。折り方をおしえてほしいです。」

と話しかけました。するとその方は、折り紙を差し出してくださり、隣に来て折り方を教えてくださいました。私の鶴は途中から正解を見失い、完成とは言い難いおかしな形になってしまったけれど、その方は笑顔で最後まで教えてくれました。最初はそのまま仲良くなれないかもと悲しく思っ

ていたので、こうして二人で一緒に何かできたことがとても嬉しかったです。最終日はフルーツフラワーパークと一緒にいくことになっていたので、

「一緒に楽しみましょう」

と言ったら

「うん！お友達！」

とハイタッチしてくださいました。私は心と心がつながるってこういうことなのだ嬉しく感じ、少し泣きそうになってしまいました。そして最終日、一緒に写真を撮ったり、手をつないで散歩したり、一緒にいろんなことができました。バスで帰る時、

「紅葉拾ったの！あげる！」

と言って紅葉をくれたり、別れる時に、

「ずっとお友達！」

と言ってくれたり、年は離れていても大切な友達ができた気分でした。今でもその方からもらった紅葉を見るたびに素敵な思い出がよみがえってきます。

私はこのトライやる・ウィークを通して、人と接するうえで大切なことがわかりました。それは心を見ることです。今の世の中では見た目で人を判断することが多くなってきていると思います。だから偏った考えを持ってしまい、決めつけてしまい、傷つけてしまうことになると思います。障害を持った方でも、何か他の人とは違う個性を持っているだけで同じ仲間です。顔を合わせ、声を聴いてその方の心を知ることによって本当の会話ができると思います。障害を持った方は、私達が囚われている偏った考えより、もっと大切なことを知っています。この世の中には色々な人がいるということを改めて理解し、今一度自分に出来る事を考えるべきだと思いました。

最優秀賞作品

高校・一般の部

音楽なんて嫌いや！



仁瓶 光夫

昨年7月の或る日、小学1年のK君はそう何度も
 吹きながら音楽室に向かうクラスの列に加わった。

私は市の教育委員会に登録しているボランティア
 の学校支援員で、発達障がいの児童がいる小学
 校で週に1回6時間、勉強のサポートを行なっ
 ています。

音楽室に到着したK君の横に座り、どうやっ
 たら楽譜どおりの演奏が出来るかを考えていま
 した。でも、そのようなことは彼にとってはとて
 至難の業で、眼と頭と指をリンクさせ演奏する
 ことは今の彼にとっては出来っこないと思ってい
 ますし、鍵盤ハーモニカを前にすると反射的に拒
 否反応が出てしまいます。

それでも何とかして、頑張っ
 て練習をしたことを先生に認めてもらえるよう
 にだけはしたいと思
 い、彼の手の上に私の手を重ねて、親指、人差
 指、中指と順に彼の指と一緒に鍵盤を押し下
 げていきました。

「親指はドで、人差し指はレ、中指は…」と私
 は声を出しながら彼の指を持つのですが、彼の
 右手は力を入れることもなく、重ねた私の手に
 委ねられて一緒に鍵盤を押し続けていました。
 時折私が手を持たずに声だけで指示し、彼だけ
 でやってみるのですが、結果は明らかで、指と
 音階が頭の中で一致していないためにゆっく
 りやってみるところで結果は変わらず楽譜ど
 おりに弾くことは叶いませんでした。

そこで、夏休みに家で何回も練習をすること
 であの短いフレーズであれば頑張ったら覚え
 られるのではと考え、鍵盤と同じサイズの模
 型と彼と同じ大きさの右手を紙で作
 り、鍵盤と指にはそれぞれ音階と指の名前
 と番号を記入し、翌日1学期の

終業式の学校に行き、「頑張っ
 て練習を！」の言葉と共に彼に渡して
 もらうように先生に伝えまし
 た。

9月に入り、久しぶりに音楽の授業で
 K君を担当することに。この日も彼は
 音楽室へ向かう列に並びながら「音
 楽なんて嫌いや！」と何度も繰り
 返していました。

授業が始まり、先生は「一人一人
 に今日は曲を演奏してもらいます。そ
 してうまく弾けた人には黄色いシール
 を貼りますので、自分の番が来るま
 まで頑張っ
 て練習をして下さい。」と言われた。

1学期と同じように彼の手の上に私の
 手を重ねて、これまでのように楽譜の
 通りに弾いていきました。でも、今回
 はただ弾くのではなく、一つ一つゆっ
 くりと丁寧にどの指を使うかを声を出
 して説明し、一音ごとに音を出してい
 きました。時間は掛かりますが、それ
 を何度か繰り返していったのです。そ
 れはK君がどれくらい覚えられるか、
 否かに関わらず行なっていました。

それを数回ほど繰り返すと次は自分
 だけで弾くことを促し、次には手を持
 って何度か繰り返しましたが、しかし
 すぐには上手く弾けるようにはなら
 ないことは明らかでした。そして途
 中で間違うと手を持って最初から弾
 くことを繰り返しました。

その練習の間に先生は一人一人の
 演奏を聞き、次々とシールを貼って
 行きました。そして授業が残り10分
 ほどになった時にK君に近づき、「弾
 いてみますか？」と尋ねた。彼は何
 も言わなかったのが私が彼に「今
 上手く弾けたから同じようにやっ
 てみたらきっと弾けるよ、頑張っ
 て！」と声を掛けてみた。」すると
 彼は何も言わずに弾き始めた。

K君の楽譜の左上には丸く黄色いシ
 ールが貼られました。勿論、指と音
 階は合ってなく、音の長さも音符ど
 おりとは言い切れない内容ではあり
 ましたが、音階も殆どが楽譜に近い
 もので全体として何とかそれらしい
 と感じる事が出来る内容で

した。先生はシールを貼りながら「よく弾けたね！頑張ったね！」と優しい言葉を掛けてくれたのです。

チャイムが鳴り、終わりの挨拶を全員でした後、K君は教室に戻る列に加わり「音楽ってだ～い好き!!」3回繰り返していた。

その日の昼休みに給食が終わって教室を出ると1年生と思われる男の子が近付いて来て、「先生、今かくれんぼをしているの?」と聞いてきた。「してないけど、なんで?」と尋ねると「あれ!!」と階段を指差した。その指の先を見ると踊り場に体を隠し、ちょこんと顔を出し「にこっ!」と笑っているK君がそこにいた。

わたしは、こまっている人がいたらたすけたいです。おかあさんは、

「だれだってにがてなことがあるよ。にがてなこともみとめるのがだいじだよ。」

とっていました。

だから、わたしはみんながにがてなところもして、みとめようとおもいました。しょうがいがある人もしょうがいない人も、がいこくの人とも、みんなとなかよくなりたいです。そのほうが、いちばんいいし、ともだちにもなれるし、たのしいからです。

優秀賞作品

小学生の部

みんなとなかよくなりたい

神戸市立雲中小学校

1年 島名 宇美

わたしがほいくえんにいっていたとき、おしゃべりがにがてなおともだちがいました。いつもおにぎょうであそんでいました。わたしとあそびたいときは、てでおいでってしてさそってくれました。あそんでるときも、ともだちはあんまりしゃべらなかつたけど、たのしかったです。わたしのひざの上にたまにすわりました。せんせいとわたしだけだったので、うれしかったです。このなつやすみにひさしづりにあいました。

「ヨーヨー。」

と、おしえてくれました。おしゃべりが、すこしじょうずになっていて、すごいとおもいました。

7月にてんにゆうせいがわたしのクラスにきました。なかよくなりたかったので、

「いっしょにあそぼう。」

と、さそっていっしょにぐるらんしてあそびました。いまはもうともだちです。

優秀賞作品

中学生の部

障害を持っている方達との出会い

神戸市立飛松中学校

3年 四元 日弦

僕の母は障害をもつ方たちと関わる仕事をしています。年に3回程度交流会があり僕は小さいころから一緒に参加させてもらっています。幼稚園の頃は何も気にすることなく一緒に遊んでいました。小学生になったころには一人一人の顔や名前を覚えられるようになり一人一人の行動の特徴に気づくようになりました。母には僕が偏見や恐怖心などを持たないようにみんな妖精さんだよ、と小さいころから教えられていました。一人一人持っている障害も違う。軽度の方や重度の方、ずっとジャンプをしている人や、目を離せばすぐにどこかに行ってしまう人…。“ほんまや妖精さんや”と当時僕は思っていました。妖精はそれぞれの個性が違う。泣き虫な妖精もいれば怒りんぼの妖精だっている。障害者の方たちだってそうだ。僕はそう思っていました。高学年になるころには障害者の方、一人一人にヘルパーさんがついて生活していること、障害者にとってヘルパーさんはとても大事な存在のこと、そんなことも気づ

くようになりました。僕が中学3年生になる前の春の交流会では、いつも一緒に遊んでいる側だった僕は事業所の方に呼ばれ一緒に進行のお手伝いをするようになりました。利用者の方が安心安全に交流会ができるよう準備、手伝い等をしました。母は一人の利用者の方についていた。司会の方の挨拶が終わり交流会が始まる。ジュースや軽食などが配られ、順番にゲームも始まっていく。一人一人の利用者の方にヘルパーさんがついてるのでスムーズに進行が進んでいく。単純な釣りゲームに玉運び、ゲームがいまいち理解できていない利用者の方には見本を見せ、ヘルパーがそっと補助をした。一歩外側から見る光景はとても穏やかで一人一人の障害を理解されているヘルパーさんが判断し何も違和感がなく強制されている雰囲気もなく、僕には僕よりもずっとずっと年上の利用者さん達がヘルパーさんがつくことで何の心配もなくして、一人の人としてキラキラしているように見えた。障害のある人たちは一人では何もできない。そしてニュースでもあった、障害者の方は事件を起こすという先入観、僕はその人にはヘルパーさんがついていないのかなあと考えた。確かに急に叫んだり、叩かれたりもした。でもそれは僕たちのことをまっすぐに見て、全身を使って表現しているんだと思うようになった。急に顔を近づけてじっと見られたこともあった。でもそんなときはニコッと笑ってこんにちはでいいんだって理解もした。今では駅で出会うと手を振ってくれる。それが嬉しかったこともあったし、急に叩かれてびっくりしたこともあった。でもそれは障害者の方たちの愛情表現なんだと思うと、だんだん受け入れられるようになってきた。僕は次の春には高校生になる。その時母においでと言われていたヘルパーの仕事にアルバイトでもボランティアでもいいから携わってみようと思う。一対一の人と人との信頼関係があって初めて受け入れてもらえる仕事。技術も大切だが、きっと心の繋がりが一番大切だと今の自分は思っている。障害者の方

は僕らと同じように生活しているほんの一部にヘルパーさんが関わる。関わることによって困っていることがスムーズに行く。もし機会があれば皆さんも参加してみてください。そして真っ直ぐな気持ちで接してくださる人たちに一度携わってみてください。純粋なキラキラした目に吸い込まれそうになると思います。そしてそのことに気づいた瞬間に接し方や声の掛け方、そして今まであった壁がなくなると思います。物心つく前から一緒に話す機会をくださった母の職場の方々、そして利用者の方々、これからもこの縁を大切に次世代へ、障害のある方たちと手と手を取り合い大きな愛の輪を作り、共に生活していける社会になればと思います。

優秀賞作品

高校・一般の部

物は試し



神戸市立神港橘高等学校

2年 五島 結愛

私は15号棟ある住宅の住民の一人でした。その住宅のうち1号棟が児童発達支援センターでした。もう住んでいないので今どんな様子なのか知らないが小学生の頃、とてもその施設が記憶に残っています。

小学4年生の頃、私は保育園から小学6年生の12人で支援センターの目の前にある公園でよく遊んでいました。とある日の夕方、公園全体を反射するほどの大きな自動ドアが開きました。そこから出てきたのは大きく泣き叫ぶ小学4年生ぐらいの男の子と女性の保育士さんのような方が2人両脇で手を繋いで出てきました。私たちは足を止めてその3人を見ていると大きな車に乗っていききました。その他にも抱っこされて運ばれる女の子もいました。急に大きな声を聞いたため驚いたが私たちは遊び続けました。いつの間にか車は駐車

場からいなくなっていました。

夏休みに入り毎日朝から夕方までいつもの子たちと遊んでいました。すると前に見たことのある男の子が走ってこっちに来ました。でも何も話さず走ってどこかに行きました。すると前に見た女性の方が話しかけに来ました。「さっきの男の子、こうくんって言うの。ここの施設に通って友達といっぱいお話ができるように練習してるんだよ。もしよかったらこうくんも一緒に遊んでもいいかな?」と言われました。そして私たちは「みんなで鬼ごっこしよ!」と誘いました。こうくんはとても笑顔で「うん!」と言いました。とてもこうくんは優しくいっぱいお話をしてくれました。夕方まで遊んでいると軽自動車が駐車場に止まりました。すると運転席から女性が降りてきて「こう?」と叫ぶ声が聞こえました。こうくんは「ママ!」と言って車の方に走っていきました。そのままこうくんは車に乗りました。するとこうくんのお母さんが近づいてきて言いました。「こうと遊んでくれたの? こうはね、つい最近まで全然お友達とお話をしない子だったの。だから今さっき車からこうが楽しそうにあなたたちとお話してるのを見てびっくりしちゃった。」と言われました。当時の私はあまりよくわかっていなかったが褒められたと感じ、嬉しくなりました。

それからだいぶ日が経ち、学校の授業で道徳がありました。それは同じクラスのももちゃんの話でした。ももちゃんは保育園から一緒にいるが一回も話したことの無い子でした。ももちゃんは黒板の前に立ち、大きな画用紙を私たちに見せました。そこに書かれた文字はこうだった。「私はみんなと話そうとすると緊張して声が出ません。でもみんなのこととっても大好きです。お昼休み遊びに誘ってくれていつもありがとう。授業の時の発表いつも紙に書いた言葉読み上げてくれてありがとう。私はもっとみんなと仲良くしたいです。だからこれからもよろしくね。」という文でした。みんなが読んでいる静かな時間ですら温かく感

じ、画用紙をめくるももちゃんの表情全てが心に刺さり私も含め、たくさんの子が泣きました。

私はその時、初めて発達障害というものを知りました。でも知らなかったのはそれだけじゃありませんでした。耳が聞こえない子、目が見えない子、自分の力じゃ歩くことができない子でした。運動会ではみんな応援合戦でグラウンドにいるのに一人ぽつんと車椅子でテントの下にいる子を不思議に思っていた年がありました。でもこの授業を通してやっと気づきました。あの子は寂しそうな顔をしていたように思いました。私はそんな子でも楽しめる運動会がしたいと思いました。私はその子に翌年の運動会練習のときに尋ねました。「出たい種目はないの?」と聞くと彼女はとても笑顔で「マラソン!」と言いました。それを聞いた私は先生に提案しました。すると4分の1なら走ってもいいと言われました。そして私たちは一緒に走り切りました。その時の彼女の生き生きとした顔を今でも忘れられません。

私は今でも思うことがあります。いやそうあってほしい、そうあるべきだと思うことがあります。それは障がいがある方を見た目で判断し、挑戦意欲を奪うようなことはしないでほしい。そして障がいがあるからといって簡単に物事を諦めないでほしい。自信を持ってほしい。自分だけにしかできないことがあるかもしれないと一度考えてほしい。そして障がいのある方をもっと理解できる人が増えること。そしてこのような授業を小学生の頃からたくさん学ばせるべきだと思います。私は障がいのある方でも同じ人間として接され愛される世の中を望みます。

佳作作品

小学生の部

ありがとうとごめんね



神戸市立雲中小学校

6年 前川 鈴

私は、3年生のころまで水泳を習っていました。その水泳の友達だったAちゃんという女の子とたまに話していました。

Aちゃんは、ダウン症でした。練習のときにプールサイドで大きな声を出したり、更衣室で走り回ったりすることがありました。その時は、「Aちゃん、ずっとこんなことしてる。」と不思議に思っていました。私が2年生のとき、Aちゃんは1年生でした。今思えば1年生だし、入ったばかりだったので、わからないこともあったと思うし、困っていたこともたくさんあったと思うのに、どうして声をかけたり、助けてあげたりできなかったんだろう、と思います。

Aちゃんは、好奇心旺盛だったな、と今は思います。なので、今考えてみると、Aちゃんに話したらよかったな、と思うことがたくさんあります。でも、たまに話すだけだったし、その頃は、ダウン症について名前しか知らなくて、Aちゃんがテストのときになかなかプールに入らなくて、テスト後の自由時間がなくなってしまったことで、Aちゃんを避けるようになってしまった過去の自分はひどいと思います。今思うとAちゃんはとても緊張していたのかもしれないと思います。

もし、あの日、あの時にもどれるのなら、怒らずに待って、次のテスト後に遊べばいいじゃん、と自分に言いかけせます。怒ってしまったらまた同じことになるし、Aちゃんはとても嫌な気持ちになってしまうし、私も未来で後悔することになると思います。

この文を書きながら、Aちゃん今元気にしてるかな、もう5年生だ。また会って話したいな、と思いました。でも、Aちゃんは優しくかったし、明

るくて面白かったのでたくさんの友達にかこまれて、たくさんの人を笑わせて幸せにしているんだと思います。

Aちゃんにもし会えたら言いたいことがあります。それは、

「あの時は避けてごめんね。いっぱい話したいことがあったのに。でも、毎週Aちゃんに会えるのが楽しみだったよ。元気でね。」

です。Aちゃんには感謝の思いでいっぱいです。私やみんなにたくさんの幸せを運んできてくれてありがとう。そんな気持ちを伝えることができるのなら、悲しい思いをする人が少なくなるはずで。障害があってもなくてもみんな同じ人間です。だから、障害がある人もない人も差別を受けず、仲良く暮らせる共生社会を実現させて笑顔を増やしたいです。

佳作作品

小学生の部

すべての人に優しい物



神戸市立鈴蘭台小学校

6年 山川 七菜

夏休みの自由研究に私は「お金の歴史」を取りあげていろいろと調べました。その理由の一つに来年から新札が発行されることがあったからです。ニュースで見た時、その新札は今のよりとてもきれいで早く手に取ってみたい、使ったりしたいと思いました。調べてまずびっくりしたのは、ユニバーサルデザインが多く使われているところでした。目の不自由な人が指でさわって識別しやすいように、でこぼこ印刷により11本の斜線のざらつきが付いていて、一万円札は左右に、五千円札は上下にそれが付いています。そう言えば、シャンプーのボトルの横にもでこぼこが付いています。でもリンスのボトルには付いていないつるつるです。

ふと私の小学校に来る目の見えないAさんのことを思い出しました。Aさんは普段盲学校に通っていますが、年に一度一緒に授業をしたり、遊んだりします。Aさんに会う前は、「目が見えないなんて可哀想」と思っていました。付きそいの人とお母さんと来るのですが、ノートは点字を使って自分で書けるし、教科書も点字を使って読めます。不自由な感じではなく私がすることと同じように出かけています。さらにAさんは私よりピアノがとても上手でおどろきました。パッと見本当に普通です。もちろん大変なこともあると思うので、そんな時は助けてあげたらいいと思いました。

最初に書いた物以外にもスロープや点字ブロック、横断歩道の音など無意識のうちに使っている物には障害の人への配慮がたくさんあります。私たちは毎日自然にそれらを使い、障害のある人と一緒に生きているんだと感じました。そして接するときも可哀想とか思わず、良いところをたくさん見つけ、支え合いの心を持って接したいです。

この先世界中もっとすべての人に優しい物や気持ちが増えてくれるとうれしいです。

佳作作品

中学生の部

最も良い接し方とは



神戸市立小部中学校

3年 山本 匠真

私の叔父はダウン症を持つ障害者です。小さいころから祖父母の家に行くと叔父がいました。叔父と一緒に食事をしたり、買い物をしたりいろいろなことを一緒にしてきました。ですが私は、どのように接すればよいかわかりませんでした。ダウン症なので、何を考えているのか聞くことはできませんでした。障害者が親族にいながら、あまり接し方を知らなかったのも、どうにか考え方を知らないかと思っていました。

小学校5年生の頃、私の通っていたスイミングスクールに新しい女性の生徒が入会してきました。彼女は髪が白に近い金色でした。自己紹介の時には、

「私は目が見えにくいです。コンタクトレンズを付けていますが、今もみんなの顔がぼやけていて、あまりわかっていません。迷惑をかけるかもしれませんが、これからよろしくお願いします。」と言っていました。彼女は肌や瞳の色素が少ないアルビノと、視覚障害を持っているとのことでした。そこから彼女と一緒に練習を重ねていきました。彼女は私たちと同じように練習していました。彼女は目がよく見えていない代わりに、耳をよく澄まして会話をしていると聞きました。話し相手の声で誰が話しているかを判断して会話をするそうです。彼女と話していると、彼女が障害を持っていることを時々忘れてしまうほど自然に感じていました。

ですがそんな時に、ふと障害があることを思い出すような場面がいくつかありました。まず、ペースクロックが見えていないことがありました。それでも彼女は、見えづらい時には周りのスタートに合わせるなど、自分の力で周りについていこうとしていました。また、練習メニューが見えていない時には、周りのチームメイトに何が書いてあるかを確認したり、コーチにメニューの内容を聞いたりしていました。このようなことがあった際には、少し遠くからでも、周りのチームメイトが助けてあげる場面がありました。

数年ともに練習をして、彼女が退会する日がやってきました。みんなに向かって挨拶をする機会がありました。彼女は言っていました。「長い間ありがとうございました。私が楽しく練習できたのは、みんなの助けがあったからです。みんなが私の目に理解をしてくれていたのが本当に助かりました。ありがとう。」

この時私は、彼女の言葉から自分の考えを見つけることができました。彼女と過ごしているときに、

私たちは彼女に必要以上の干渉はしませんでした。これが大切なのではないかと考えました。振り返ってみると、私の父は必要な時に、必要な分だけ叔父を助けていました。どのように叔父と接していけばよいかわかった気がしました。

先日、叔父と一緒に食事に行く機会がありました。隣の席に座って食事をしました。その時に、困っているときには助け、自分で自由にできる場所は手を出さず、必要以上の干渉は避けました。このような接し方を身につけたからには、日々の生活で生かしていきたいと思います。街中で困っている人には、そっと手を差し伸べ、必要以上の干渉は避け適度な距離で人と接していきたいと思っています。

佳作作品

中学生の部

年寄り笑うな行く道だもの



神戸市立丸山中学校

3年 山田凜乃花

「子供叱るな来た道だもの、年寄り笑うな行く道だもの」という言葉があります。母は子育て中の教訓として祖父から教えられたそうです。私がまだ小さい頃、母に叱られた時、傍にいた祖父が優しくかばってくれたことをうっすらと覚えています。

祖父は今年、80歳になりました。祖父が車の運転をやめた頃から、祖父母が病院に行くことが増えました。母が通院に付き添ったり、買い物を手伝ったりしています。私も、時々一緒に買い物に行きレジを手伝ったりスマホの使い方を教えてあげたりします。祖母は、買い物する時にレジでとても時間がかかってしまうようになったといいます。ほんの数年前までは、お年寄りがレジで時間がかかるのを不思議な気持ちで見ているそうです。自分が歳を取った今、理解できたそうで

す。節電で暗い店内では財布の中が見えにくく、耳が遠くなって早口の店員さんの声が聞きとりにくく、また指先でお金をつまむ動作が段々難しくなっていくようです。母は、祖父母と年の近い高齢者が困っているのを見ると、積極的に助けてあげたいと思うようになったといいます。それに、母が妊婦さんや子供を連れた人を助けているのをよく目にするようになりました。自分自身や家族の経験から大変さを知っているの、自然に声を掛けられるのだと思います。介護や育児の大変さが、社会で益々認知されつつあります。高齢者や子供を思いやることが、結果全ての人にとってより良い社会になるという考えが、広がっているように思います。

では、障害者の方に対してはどうでしょうか。障害を持って生まれてくる人もいれば、障害を持つことなく一生を終える人もいるでしょう。しかし、ある日突然障害を持つ可能性は、全ての人にありま。内閣府の調査によると、日本人のおよそ7.6%が何らかの障害を持っており、国連の調査では、世界人口のおよそ15%が障害を持っているそうです。決して少なくありません。自分自身が、家族が、いつ障害者になるか分からない。そう考えると、障害者が暮らしやすい社会の実現に向けて、もっともっと努力できると思います。

誰でも、自分の家族の苦痛や望みを理解して、助けてあげようとするでしょう。しかし障害者がよい社会で生きていくことは、家族だけでは実現できません。祖父母が買い物をする時は、レジの方がゆっくり大きな声で話し、列の後ろの方々がのんびり待つて下さるような、優しい社会であって欲しいというのが、私の願いです。障害者の家族の方達も、たくさんの願いがあるでしょう。より多くの方が、その一つ一つに耳を傾け、実現できるように力を合わせて、これからの社会を創っていけたら、とても素敵だとおもいます。

佳作作品

高校・一般の部

私のきらいだった友達



神戸市立神港橋高等学校

2年 新田 凜

私にはきらいだった友達があります。きらいなのに友達というのはおかしいですけど、私にとってあの子はいくらきらいでも絶対に友達をやめることができないかけがえのない人です。

あの子と出会ったのは小学校の入学式です。その時のことを私は鮮明に覚えています。初めて教室に入り、自分の席に座り、顔も名前も知らない人と自己紹介をする時でした。隣を見るとあの子のすぐそばにはあの子のお母さんがいて私はどうしてだろうと不思議に思ったけれど気にせず自己紹介しました。私の自己紹介が終わりあの子の番になった時、私はびっくりしました。なんだか少し変な感じの話方で上手く話せていなくてなかなか聞き取れなかったけれど、あの子の名前は「さくらちゃん」でした。その日から私はさくらちゃんと一緒にいることが多かったです。

入学して数日後に担任の先生からさくらちゃんが障がい者だということが伝えられました。当時の私は障がい者という言葉は知っていたけれど知識がなく意味まではしっかりと理解していませんでした。けれどさくらちゃんがいたことで障がい者は「変な人」という解釈をしてしまいました。なにかをする時担任の先生はいつも隣の人とペアになってしましようと言います。なので私はいつもさくらちゃんと一緒でした。まわりのみんなは真面目にちゃんと取り組んでいるのに、さくらちゃんはみんなと違って真面目にやらずにいる人なところに走っていったりと変なことばかりしていて、私は全然楽しくなくて不満ばかりたまっていきました。さくらちゃんの近くにはいつも担任の先生とは別の先生がいました。さくらちゃんの近くにずっとその先生がいるなら私じゃなくて

その先生とずっとペアになってすればいいのについて私は思っていました。小学生の6年間はさくらちゃんと同じクラスにはならなかったことは少しあったけれどほとんど同じクラスでした。だけどさくらちゃんとはあまり関わらないようにしていました。それは中学生に上がっても同じでした。

障がい者のさくらちゃんといると一緒にいる私までまわりから変な目で見られてしまう、変な目で見られたくないからさくらちゃんを避けて話しかけられても適当に返事をして流して会話を終わらせていました。当時の私は本当に最低でした。けれどそんな私に障がい者への見方が変わる大きなきっかけがありました。それは障がい者についての講演会でした。真面目に聞く気は初めはなかったけれど、話を聞いていくうちにその話とさくらちゃんが重なっていき自然と身体が前のめりになり真剣に話を聞いていました。その時に障がい者は変な人という解釈は間違っていることだと分かりました。

その講演会が終わってからさくらちゃんへの対応が大きく変わりました。話しかけられたら適当に返事をして流したりするのではなく上手く話せてなくてもちゃんと最後まで話を聞こうとしました。変に割れ物にさわるような接し方はせず、他のみんなと同じように普通にいつも通り接するようになりました。まわりから変な目で見られてしまうから障がい者のさくらちゃんと関わらないようにするのはではなく、変に見られないように普通に友達だと見えるようにさくらちゃんと普通に関わろうとしました。ずっと普通という言葉を使うことが多いけれど正直普通がなにかわかりません。私が思っている普通がみんなと違うことだと思っています。だけど私が他の友達にしていることをさくらちゃんにも同じようにすればそれでいいと思っています。さくらちゃんは私たちとは違う障がい者だけど全く変だと思いません。変ではありません。障がい者というだけであって他は私たちと一切なにも変わりません。昔の私はさ

くらちゃんがすごくきらいでした。でも今はさくらちゃんがとてもだいすきです。中学を卒業してから会うことは減ったけれどまた会った時は楽しく話ができたらいいなと思っています。素敵な友達に出会えたことに私はとても嬉しく思います。

佳作作品

高校・一般の部

知識をつけ、助けよう



神戸市立神港橘高等学校

2年 長谷 美憂

人はなぜ障害者という枠をつくってしまうのだろうか。人間は生まれた時から一人ひとり顔つきだったり、身長、体重、さまざまな部分が違ってあたりまえだと思います。ではなぜ、腕がなかったり、目が見えなかったりすると人々は「障害者」と判断してしまうのだろうか。私は人々が世間がその人にとっての当たり前だったり、普通と誤ってしまっていることに合わないと思いついてしまうからだと思いました。私はそんな中でも「目」についてふれていきたいと思いました。私をもっと詳しく「障害に」ついて知りたいと思ったことが二つありました。

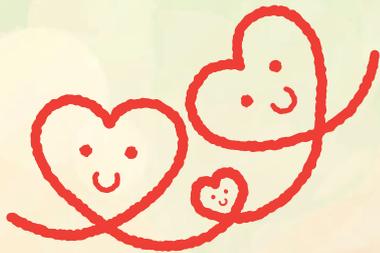
まず一つ目が、私が住んでいるマンションには目が見えない女性が一人います。その女性は歩くときに必ず持っているものが、白杖です。白杖には、周囲の情報を入手することや身の安全を確保する、視覚障害であることを周囲に知らせるという役割があります。その女性は白杖を使って階段を下りたりしていました。そしてその前に手動のドアが閉まっていました。私は手伝おうという気持ちでドアを開けようと思いました。それと同時に勝手に開いてしまうと怖い気持ちもあるかもしれないと考えました。なので「どうぞ」と一言かけてドアを開けると、その女性はとても優しい笑顔で「ありがとう」と言ってくれました。私はな

ぜかとても嬉しい気持ちでいっぱいでした。そのことを家に帰ってから母に話すとすごく考えて行動できたんだねと言われて、さらに嬉しくなりました。ただドアを開けるのではなく相手の気持ちになりどうして欲しいか考えてから行動すると良いのかなと考えました。目が見えない分、怖い気持ちが強いはずなのにその人の笑顔を見ると次も行動していこうという意志がとても強くなりました。目が見えないと音を取り入れると思うので声をかけていくというのもいい方法の一つではないかと思いました。

二つ目は、YouTubeの動画でここちゃんという10歳ぐらいの女の子のことで、ここちゃんは先天性の小眼球症を患い両眼全盲の女の子です。その一つの動画に宿題をするという、算数の問題を点字で打つ姿がありました。もちろん問題も点字です。それをスラスラと読み取り点字を打ち、そして楽しそうにしているところがとても可愛く、惹かれました。そこからいろんな動画を見ていくようになりました。そこで彼女はアスレチックに挑戦していたり、ピアノを弾いていた、電車に乗る練習だったり、外をたくさん歩いてみたりと心がすごくワクワクして言葉にできない気持ちでいっぱいでした。ここちゃんのご両親たちも補助や声をかけていき、彼女もその声や支えに応えるように足を進めていきとても感動しました。そしてここちゃんはいつも楽しそうに笑っていて前向きであきらめない姿を見て私のほかにも影響された人がたくさんいるのではないかと思います。怖いという言葉を出しても、目の前のことから逃げずに挑戦している姿を尊敬しました。彼女の動画を見ていくうえで、義眼というものがあることを知りました。ここちゃんは顔の大きさと目のバランスを保つために入れているらしいです。他にも義眼には外観改善のために入れるものだったりします。彼女の細かいところまで説明し載っているので理解する人や初めて知ったなどさまざまな意見もあったので、自分から興味を持

ち知っていくことはいいことだと思いました。

私はこのことを通してもっと知っていきたい、もっと助けたいなどといった気持ちが強くなりました。例えば私が知れたことは、目が見えない、見えにくい人が使っている白杖を上を持ち上げているときはその人のSOSなので見つけたら声をかけるといったことです。一つでも多く知れていたら一人で困ることなく助けられると思います。私はこの作文を通して人を助けられる人になりたいと思いました。誰かを助けたときに笑顔を見れるととても嬉しくなるからです。障害者の人たちにも助けが必要な場面はたくさんあると思います。そのような人たちを見ているだけでなく積極的に行動をおこせるような人になりたいです。



「思いやり」「譲り合い」「助け合い」

福祉の心を育む神戸の市民運動

ふれあいのまちKOBE・愛の輪運動



令和5年度

温かい手

編集・発行

社会福祉法人 神戸市社会福祉協議会 地域支援部
ふれあいのまち KOBE・愛の輪運動推進委員会

神戸市中央区磯上通3丁目1-32
こうべ市民福祉交流センター4F

TEL (078) 271-5317
FAX (078) 271-5366

神戸市 福祉局 障害福祉課

神戸市中央区加納町6丁目5-1

リサイクル適性 

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。

この冊子は、神戸市社会福祉協議会が設置する社会福祉推進基金に寄せられた寄付金を一部使用し作成しています。